

手
記



米軍機P51の 機銃掃射で一人死亡

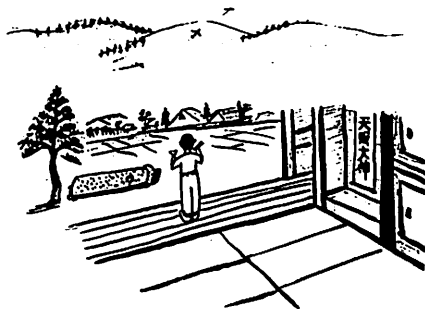
羽村市羽二、四八六 並木 芳松

私は、少年航空兵を志願し第一次試験に合格したので、一時的ということで、西多摩村役場（現羽村市役所）に勤めていた。（昭和二十年四月就職当時十四歳）

月日は忘れたが、お昼を食べに家（現西小の校庭）に帰り、食事をしていると、突然けたたましい飛行機の爆音がしてきた。私は、箸と茶碗を持ったまま縁側に飛び出した。P51三機が、向こう山（多摩川対岸の山）を飛び越えて南方に行くのが見える。

あわてて、庭の防空壕へ入り、数分たつと、バリバリッと雷が落ちた時のような連続音が頭上に聞こえてきた。さっきのP51が戻ってきたのだと直感した。家の屋根は、穴だらけになっているように感じた。

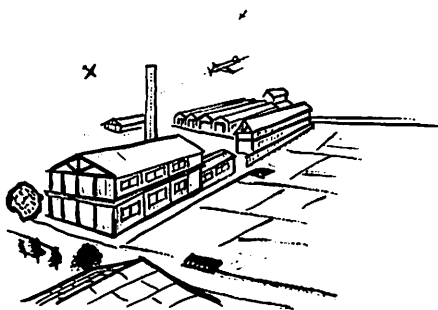
少したつと、「救護班はどこにいる、救護班」と怒鳴る声が聞こえてきた。私の家の北側に、西玉社（元製糸工場で、戦時体制に入って軍需工場となり、電気の絶縁体を製造し



向こう山にP51が見えた



庭の防空壕の中



西玉社を攻撃するP51

ていた)があり、そのこの社宅の方から聞こえてきたので、私は、そこへ走っていった。社宅の窓を覗くと、女の人が、「苦しい」と呻き声を上げている。畳にべっとりと、真つ赤な血が流れ出している。右乳房の上を白い布で伯父が押さえている。「苦しい、苦しい」と叫んでいる。物凄く有り様に、暫く茫然としていた。

その女の人は、戸板に乗せられて、坂本医院(玉川神社西側)まで運びこまれたが、坂本医院では処置できず、福生方面に向かう途中で、息絶えてしまったということだった。



空襲の下でお産

羽村市緑ヶ丘四―十二―一六 原田 静子

昭和十九年十二月二十三日、寒い北風の吹く午後、主人にも召集令状がきた。国民兵であった主人に令状が、と一寸とまどったが、前々から男であるかぎりはと思っていたので、さしておどろきもせず、子供たちを隣のおばさんにたのみ、小作の富岡光学へ自転車で行った。

受付で主人に会わせていただくようにたのむと、二階から下りてくるところだったので赤紙「令状」をふって見せた。見上げる私、見下ろす主人、なんとも言えぬ一瞬の思い。一生忘れられない思いだった。

二十年一月四日佐世保「海軍」へ入隊とのことで、十二月三十日にあわただしく出征しなければならぬ。九州福岡の柳河まで一昼夜かかる。その時私は男子二人、女子一人と四ヶ月の身重でした。主人は発つときに、お前は心配いらぬが、姉がまだ結婚していな

いのが心配だと言っていた。肉親のつながりのつよきをつくづく思い知らされた。無事に入隊した主人は内地勤務だったが、カッケとやらで長崎の保養所に廻されたので別に命にかかわるようなこともなかった。

三人半を守りながら、昼間は近所の農家の手伝い、夜は他家の縫物を一時二時まで。その間手作りの飴菓子作り、さつまいもからとったデンプンで作った飴菓子は、とうもろこしをいり、はぜたものに飴をからませ、丸めたもの。その頃、菓子屋さんはなかった。菓は、青梅を水をはったうつわの中へすり下ろしてふきんでしぼり、カスを捨てて水をなべに入れて火にかけて、飴色になるまで煮つめる。一升の梅で直径二センチメートルぐらいの入れものに一ぱい程しかできない。燃料は山から枯れ枝をひろってきたものを使う。日常胃の弱い主人なので常備薬に持って行かせた。留守を守りながら、私が縫物をしていると、五歳の長女が夜中に目をさまし、「お母さんまだおよそのお着物縫っているの」と私を気づかせてくれた。

六月二十三日が予定日だったので、毎夜かまどへ水をはったかまをかけ、杉の葉を焚口に入れマッチで火をつけるように用意して床についた。すべて長男四年生にさせなければならぬ。二十三日の予定日の夜に陣痛が始まり、空襲がなければと祈るばかりだが、やっぱり産み落とすと同時に警戒警報になり何としても電気を消さなければならぬ。心の準

備と必要な物をととのえて置いたので、ヘソの緒を切りはなし麻でしっかりむすび身二つになった。切りはなす時には、子供の命私の命にかかわると思うと手のふるえるのを感じた。実家には母もいたが、空襲になったら誰の手もかりられないので、自分一人で産まなければと覚悟していた。子供の顔をよくふきとり、布につつま足元に寝かせて置き、自分の身の始末をし、子供が気になるので時々体をそっとたたくと声をだすので眞暗闇のなかで後産を無事におろすことができた。その時は涙の出る程嬉しかった。子供の息づかいに気をつけながら夜の明けるのを待った。夜が明けたので長男をおこしカマドに火をつけさせ、湯たらいを濡縁にはこぼせ、産湯は自分でつかわせ、用意して置いた着物を着せ母子共にさっぱりした。すべて長男四年生がやってくれた。安心して床についていると、隣のおばさんが、私の姿がみえないので「静ちゃんなあ赤んぼうが産まれたのかヤア」と何時も開け放しの濡縁から声がした。産後の肥立ちもよく、外にでるようになると会う人ごとから、えらいもんだなあとほめていただいた。産めよふやせよの時代だったので、間違いがあつたら大変と心にちかっていた。二十年六月二十三日十一時無事に出産。小さいながらにやさしい息子である。

主人も十月末に帰って、一家六人の生活になった。だが食糧難で、そのうえに主人の仕事がなく、話にならない苦労が続いた。お産のために一升だけとっておいた米も、私だけ

が食べるのもしのびず、大豆、さつまいもを入れたおかゆを作った。大変びろろな話だが産前から下痢が続き、産後もちろんのこととお小水のような便が続いたが、子供の時から粗食になれていたので内臓が丈夫だったのだろう、何時のまにか治っていた。母の言葉に「産前産後の下痢は一生なおらない」ときいていたので心配だった。でも八十になった私だが、何とか丈夫で暮らしている現在である。今年二月九日に主人に先立たれた。八十七歳の生命だった。毎日冥福を祈っている私である。



終戦時の思い出

羽村市緑ヶ丘一―六―二十四 青柳 宇一

昭和十七年、小学校高等科卒業と同時に、陸軍航空整備学校（現横田基地）に入校した。入校といっても、数ある兵舎の中の一棟が我々が住み込みで教育を受ける場所である。もちろん毎日の生活も廻りの兵隊さん達と似たようなもの。

入校第一日目の夕方の入浴時の事、何しろ同年輩の若者が多勢一緒に入浴するめずらし

さから大騒ぎをしていると、突然に声あり。直ちに入浴中止、校舎前に整列せよの命令。何事が始まるのかと思っていると、なんと初めての総ビンタだった。しかし、百名程の人数を順々に殴る平手打ち、背の高い方から叩いて来て背の低い私達の所に来た頃は班長殿の掌も痛くなつたのか、力弱いビンタになっていた（その後ビンタは日常茶飯事）。

間もなく整備学校は、立川陸軍航空整備部隊となり、我々も軍属としてそれぞれの分野に作業員として配属となり、家から通勤となつた。私は、当初は金属班で教育を受けていたが、やがて機体修理班に異動。傷ついた機体の修理等をしてきた。戦争末期頃になると、赤とんぼといわれた二枚翼の練習機の布張りの翼を切り裂き、操縦席から続いたワイヤーの先のマジックハンドのような金具に、小さな爆弾を左右一個ずつ抱かせたという誠に心細い思いや、兵舎前の広場等あちこちで日本刀を振り廻し切り込みの練習をしている将校、下士官級の人達を見るにつけ、戦争終局も頭に浮かび、同時に未知の戦後の不安感で一杯だった。そんな時期、私自身玩具のような機体を手掛けていながら飛行士を志願した。あのグラマン戦闘機やB29爆撃機の飛んでいる空にいくことを選んだのだから、現世ではやっている一種のマインドコントロールってやつか？なんて考える今日この頃です。

生きのびて老の今日ある原爆忌



戦争と人間

羽村市羽中一―六―十七

長谷川 喜市

対空放火に

一機のグラマンが火を噴いた

みるみるうちに

火達磨となったグラマンは

空中分解しながら

近くの滑走台の上に落ちてきた

艦内警戒第三配備になると

もの珍しそうに

あっちの壕こっちの壕から練習生達は

おそるおそる

滑走台に集まってきた
俺も走った

飛行機は

鉄屑となつて散らばっていた

煙をくすぶらせながら

搭乗員の姿は見えない

尾翼の部分らしい残骸に

蛇のようなものが巻きついている
はらわただ！

善行章を三本もつけた古参の兵長が

長い棒の先に吊るすと

何の感傷も残さずに

海へ投げ捨ててしまった

人間って何だろう
私は立竦んで考えていた

註

戦争末期の昭和二十年、愛知県知多半島にあった第二河和海軍航空隊での出来事です。格納庫の前に水上飛行機を台車に乗せて並べてありました。ここを滑走台と呼んでおりました。格納庫は五、六棟もありましたが、その格納庫の前が海まで八十メートル、横は百メートル程もあったのです。艦内警戒第三配備というのは、一般で言う空襲警報に当たるのが第一配備、警戒警報が第二配備に当たるでしょうか、第三配備とは通常の戦時体制でした。

練習生というのは、六ヶ月の飛行予科練習生（一般には予科練といわれています）を卒業して飛行練習生となった者のことです。

壕というのは、航空隊の前が山になっていたのですが、その山に長い横穴をいくつも掘って避難壕としていた防空壕のことです。

善行章というのは腕につけている山形のマークのことで、三年無事勤めると一本貰える

ので三本というのは九年以上勤めている超古参兵です。因みに三年もたたないで二等飛曹となった我々は、ぼた餅下士と呼ばれていました。棚からぼた餅が降って来たような下士官という意味のようです。

尚、この詩は終戦後すぐに書いたものですから表現などに不満もあるのですが、その当時の雰囲気が残ればとあえて手を入れずにおきました。



回想 溝の口く羽村

羽村市羽東一―三十一―一―二〇五

加瀬 好太郎

現在の都営羽東一丁目アパート、旭ヶ丘団地が最初に完成したのは、昭和二十七年八月、当時は都下西多摩郡西多摩村奈賀字坂の上の桑畑の中で、木造二戸建七十五世帯、柵型に整然と並び、中央広場に古い桜の木が二本あって春には爛漫と咲き誇っていた。まだ青梅線は単線で、二輛か三輛の古い電車が囲いのない線路をのんびりと走っていた。

それまで、私たち（私は昭和二十一年二月五日、中国北部から復員）は、疎開先の妻の

実家の霞村から青梅市新町都立戦災引揚者の霞寮（戦時中は富岡光学の工場、現在誠明学園）にいた。霞寮が解散になる時、割当てに申し込み、西多摩村羽三十六番地の都営住宅へ昭和二十七年十一月六日に移って来た。

昭和十八年九月二十日、私は三十一歳、生憎と朝からの土砂降りの荒れた日で、赤土に足を取られながら、神奈川県川崎市の溝の口の高台にある東部六十二部隊へ召集による入隊のため、同行者四人と坂を登っていた。国鉄京浜線蒲田駅から満員の私鉄目蒲線に乗り換えて武蔵新田駅下車、田舎道を少し歩くと日本内燃機という軍需工場があった。私はその工場で陸軍の九五式小型四輪機動自動車と大型の除雪車などを徹夜徹夜の作業で油にまみれて造っていた。

残暑の九月、突然、川崎の住まいの隣家の佐藤氏が太った体で白いYシャツ一杯に汗をかいて工場に私を訪れ、一枚の赤紙を私に渡した。来るべきものが来たと言う思いが私の胸の中を走った。戦局は拡大するばかりで、泥沼の様相を示しており、南方の海戦で、我が方損害少なく敵方に多大な打撃を与えた、と連日新聞に大本営発表として大きく報道されていたものの、軍の後退敗色は隠すべくもなく、街には物資の不足と国民全体の不安の顔が溢れていた。

川崎駅裏口の南河原の私の家には、中風で十年も寝たきりの父、案外達者な母、昭和十

五年に結婚した妻、マメで目の放せない可愛い盛りの子三歳の長男がおり、妻は身重で第二子を宿していた。こんな家庭を置いて、一枚の令状で生死分からぬ戦線に行けばどんな結末になるのかは火を見るより明らかな事であるが、当時の国内情勢から見れば、こんな一家の悲劇など問題外の事であつたらう。

昭和十八年頃の出征者達は敵国スパイの目があるという事で、派手な幟も自粛して穩便に入隊するという状態であつた。

入隊の朝が来た。荒れ模様吹き降りで、川崎駅の外れから出ている南武線に乗る。妻と義弟と姉と妹と四人、篠突く様な雨が電車の窓ガラスを打ち、川崎の街が霞んで後ろへ飛んで行く。同じ入隊者であろう在郷軍人会の外被を着た人達が数名、身内の者と見える人達と元気で語り合う姿があつた。溝の口の駅からは登り坂で、普段あまり人通りもない駅前も、入隊の時間もせまっているのでかなりの混雑で、日の丸の旗を肩から巻いた人とか、国民服の人達が家族と共に坂道を急ぐ。やがて高台の頂上に雨で煙る東部六十二部隊の営門が眺められ、私達は色々の思いを秘めてその営門をくぐつた。

昭和二十年八月十五日、私は中国北部天津海光寺谷四二〇二部隊の司令部で終戦を迎え、昭和二十一年二月、中国北部河北省大沽の港からアメリカの上陸用舟艇で無事佐世保へ復員出来た。

小さなリュックを背負い、復員兵の私が川崎の住まいの焼け跡に立ったのは、佐世保へ上陸してから三日目の朝で、ただ、呆然と広い焼野原を眺めた。

昭和二十年四月十五日の京浜工業地帯の大空襲で父が亡くなったという事を、その時、日本の土を踏んだばかりの私は全く知らなかった。

長い間、中国北部の山野を三八式歩兵銃がついで駆け回り、多くの戦友を失い軍国主義の大目標にまどわされた。思えばむなししい戦争とその代償である。戦後五十年と聞くいま、振り返って見ると、平和な現代は正に楽園である。



ただ無心で戦った

羽村市神明台一―二十二―五 相島 勲

私は陸軍軽爆戦闘員として中国戦線、太平洋戦線に参加し、九死に一生を得て日本に帰還しました。当時の若者がいかにして戦い、祖国のために戦死していったかを、後世のために、拙い一文を残しておきたいと願って投書致しました。

戦後五十年もたった今では、当時の若者がいかにして戦ったかを話しても、その間にギャップがある様に感じて仕方がありません。私の属していた飛行七十五戦隊は戦歴の伝統ある戦隊で、上下の間が暖かい心で結ばれており、一丸となって戦ったことです。現役で入隊した私は独身であったからかもしれないが、死と言う事を考えた事はありませんでした。ただ無心で戦ったことが想い出されず。戦友愛が強かったのもいつ死んでいくか知れない身であったからだと思います。

陸軍少年飛行兵について

特に志願して特攻隊となり、戦死して行った若者の事を書いておきたい。少年飛行兵十二、十三期生の、あのあどけない顔に必死の瞳を見る度に涙を抑える事は出来ません。

現在、武蔵村山市の禅昌寺に立派な記念の塔が建っております。毎年彼岸の日に参詣して、御魂の霊が安らかである様、祈っています。



大戦と抑留 終戦五十周年にあたり

羽村市羽東三―二十一―十九

森田 佳和

私が終戦の詔勅を聞いたのは、昭和二十年（一九四五年）八月十七、八日の頃であったと思う。当時ソ満国境は風雲急であり、それより前、国境より二十キロメートル位の所に位置する鶏寧県柳毛屯にいたが、命令により牡丹江正面に移動して間もない頃であった。

ソ連の参戦と共に戦況は近くにあつて、前線の戦友達の通報電話も、これが最後の通報となるだろうと切れてしまった。また銃声や爆発音も電話の中に聞こえてくる。時をうつさずソ連軍の宣撫班が到着して来て、案内役を出せと申入れがあつた。私が案内役を命ぜられて処々を案内するうち拳銃の実弾を発射されるなど、今にして思えばぞつとする。

やがて数日たつと、牡丹江の兵器廠の焼け跡に収容された。その頃、牡丹江は雨の日が多かつたが、小雨の日には砲弾が自然爆発を起こすこともあり、生きていく心地はなくなつてしまふ。

引かれ行く身となり、抑留第一歩の捕虜となった時から、戦死した戦友の姿を見るたびにうらやましいと思う時がしばしばありました。収容所に十日位いたと思う頃にソ連軍より通達があつて、小川少佐以下一千名が一個大隊に編まれてソ連領に向かうこととなり、収容所門前に整列させられた時に、米国より貸与のUSAそのままの十輪車数十輛が到着していた。

一個大隊の我々に向かい、これに乗れと命令があり綏芬河すいふんが駅近くまで運ばれて下車となった。ソ連領に通じる満州鉄道の線路上を進行し、やがて山を越えるトンネルへと入って行った。真暗やみで所どころの避難所には、砲弾が不気味に山と積まれていた。進むにつれて向こうに光が見え、やがてトンネルも出られて山合を縫うように道が続いている。日も西にかたむいた頃、小さな村落に着く。そこがグロテコウという所だった。

一夜の野宿も朝となり、街道では子どもたちに石を投げられたり、つばもかけられるなどして行進し、イリチョーフカと言う地下壕の有る所へ着いて付近の草むらの草をむしり取り、それを壕内地面にしいて寝入りについた。

道中の疲労のためか下痢する者が多くなり、発疹チフスの人が何日かで百人を越す程出てしまい、衛生兵も皆チフスになり皆無。私を長として四十名が看護に当たることになり、一夜に十一名もの死者が出た。テントの中の死者を引取れと言われて、私がテントに入っ

た時、大きな驚きに変わった。それは十一人全員がのどから性器の上まで一文字に解剖されてたのだ。私は十八の時に覚えた般若心経をと覚えて、看護にあたっている何人かを連れてイリチョーフカの丘の上の処に十一人を埋葬した。この地には、何ヶ月かの間に百二十名程埋葬している。

死者百二十人の内ほとんどが、うわごとの中でお母さんか最愛の妻かを呼びながら永眠していった。ただただ冥福を祈らずにはいられなかった。また、中には望郷か何かで精神に異常を来してしまい、人の見境もつかぬために食事も外の者に盗み食いされていたのを発見した。そこで私は、給食の都度面倒をみながら、私が十八、九歳と二年にわたり、慶応大学神経学科の学生より習い取った知識によって、約三ヶ月間にその者も人の見境がつかよくなった。そんな時、私等健康な者達は外の作業地へと移動させられていった。行き先はナホトカであった。

海岸へ出ると、波の向こうには日本の岸辺があると思いつながら、帰る日を待ち続けた。

私は幸いにして患者名簿に書かれていたために、第一回目の引揚船に乗船出来た。昭和二十一年十二月初旬、舞鶴に上陸し、日本の土を踏むことができた。

気にしていた精神に異常を来していた者も、第二回目引揚船にて帰還した旨、山梨県竜

王町より便りが来たので安心して竜王町へ出向き、再会を喜びあい、三十年後再々会している。その節に彼の敵父より貴殿は息子にとって命の恩人であるといわれた。

その後の私は、羽村の東ヶ谷戸の森田の家に養子に迎えられ、義弟森田清八のソ連抑留を知った上、義母につくすことを誓った。義母は、清八弟が生死不明のまま三十三年間待ち続けていた。

この五十年間平和を祈り続けて来た私である。



永遠の平和を願いつつ

羽村市緑ヶ丘一―十四―三

中村 千代

昭和二十年、戦争も日増しに激しくなり空襲警報は昼夜の区別なく続き、焼夷弾はいたる所に投下されました。

当時私は看護学生として、東京の城南にある大学病院の寄宿舎におりました。病院にも焼夷弾は投下され、火の海となりました。火の勢いは強く、婦長の指示のもと

衣服のまま水をかぶりバケツリレーをしました。びしょぬれの衣服もすぐ乾いてしまい、何度も何度も水をかぶったり、池にとびこんでぬらしたことを思い出します。

三月十日、東京大空襲により多くの生命が失われ、私の知人も何人か亡くなりました。東京は焼け野原と化してしまいました。

私のいた病院も、深川方面からの被災者がトラックで毎日運ばれて、病院は満床。廊下まで被爆者で人の通るすきさえないほどでした。運ばれてくる途中で死亡する者、息絶えて運ばれる者、区別もつかぬ状態で、死体は病院の車庫に安置されましたが、重なりあうほどでした。「水、水」「あつい、くるしい。看護婦さん助けて」等、断末魔のうめき声はまさに地獄絵そのものでした。

大学病院も、若い医師は戦争に行き、教授とわずかな医師、留学生、看護婦、看護学生で医療は続けられていました。

被爆者のほとんどが火傷で膿がたかり、ウジがわき膿をなめていました。患者達はウジが膿をなめると傷が治ると言っていました。たしかに壊疽した皮膚は傷跡を残してふさがっていきました。ウジも治療を手伝ってくれたのでしょうか。現在ではとても想像できないことです。

また出血多量、細菌感染で手足を切断する人も多くありました。医療器具の消毒も末期

には電気、ガスも止まり、マキを燃して煮沸消毒をしました。白衣はよごれ、皆で「これでは黒衣の天使ね」と言ったことを思い出します。骨折した人の副木をはずすと、シラミが佃煮の様にたかっていたこともありました。

この様な中にも空襲はますますひどくなり、床について眠ることもできず、モンペ姿で仮寝の日が何ヶ月も続きました。また食糧もなく、食事は薄い雑炊。味噌汁にはキュウリの薄く切ったのが二〜三切れ入っていたことを思い出します。友達の中に、茨城の実家からお米を送ってもらった人がいて、皆でその生米をかじったこともありました。

やがて広島、長崎に原爆が投下され、八月十五日の終戦を迎えたのです。
あの日も暑い日でした。

窓には爆風をさけるため縦横に紙が張られ、正面には「一つ忠孝をむねとし至誠一貫君国に報ずべし」という、毎夜点呼の時斉唱する十訓がかかげられている教室で、ラジオをとおして天皇陛下のお言葉を聞いたのです。玉音といわれる陛下のお声がただただもったいなく、頭を下げておりました。

私達は生まれながらに神の国を信じ、洗脳されていたのです。勝利を信じ国のため死ぬことなど恐れない毎日でした。敗戦など思いもよらないことと信じられず、小学校で習った元寇の役の神風を思い出し、神様がアメリカをやっつけてくれると思ったりしました。

しかし、その日は空襲警報もなく、静かな青空を赤トンボが飛んでいました。焼けあとにはトウモロコシが赤い房をつけ、太陽がきらきらと光っていました。私はいままで気のつかなかった情景を眺めていました。今日からは空襲もなく、一夜ゆっくり眠れるのだ。そして勉強することもできるのだろうか、と信じられない気持ちでした。

あれから五十年、経済大国となり医学の進歩もいちじるしく、私の母校もりっぱになり、当時のことは夢のまた夢となっていました。

しかし、戦争の犠牲は今なお続き、中国残留孤児、従軍慰安婦の問題等、胸にこみあげるものがあります。二度とこの悲劇をくりかえさないことを祈って、私の体験をつたない文章で記しました。

短歌 三題

一日を生きながらえて今日もまた敵機襲来のサイレンは鳴る

十八の胸にやきつく東京の空そめたる爆弾の雨

空襲のサイレンもなく焼けあとに赤トンボ飛ぶ終戦の日よ



その時 わたし十七歳

羽村市五ノ神四―二―十三 山影 幸子

昭和二十年八月九日、突然のソ連（今のロシア）の参戦は、樺太に住む私たちにとって、まさに青天のへきれきであった。もちろん、それまでも物資の不足は目立ち、若者達は援農援漁に駆り出され、勉強は二の次の時代であった。戦争のはげしきを受けとめてはいたが、あの時代の情報といえば、日本に有利なことの方が多く、まして、日本とは離れていくだけに、あまり深刻に考えないままに、私は青春まつただ中であつた。

はげしい艦砲射撃の中、「女・子どもは縄にかまれ」と隣組のおじさんの声にせきたてられ、着の身着のまま家を後にし、山の中へと逃げた。日中は林の中にかくれ、夜になつて歩き出す。小さな子は手を離しても大丈夫なように、身体ごと結わえる。お腹のおおきなおばさんは元気な者が囲む。ねむり出す子を叱りつける。大人が互いに小さな子を背負う。こんな状態でとにかく歩く。あわてて出てきたとはいえ、それぞれ食べる物は少々持つ

ている。はじめの頃は、互いに出し合いゆずり合って一緒に食べていたのが、いつのまにか集まらなくなった。自分の持ってきたものは自分のもの。こっそり家族で隠れて食べる様になった。親しかった近所同士も、何となくギクシャクしてきた。あれほど仲良かった子どもたちも、食べ物のとり合いをはじめ。欲しいと泣き叫んでもみんな知らんぷり。人のことなど考えていられない。誰も助けてくれない。時々、沿岸警備に駆り出されていた一家の主人が、あちこちに投げ出されていた食料などを持って、家族のもとへと帰りあえず帰ってくる。でも、私の父は全く姿を見せない。動員で駆り出された弟はどうなっただろう。小さな妹は、あちこちで食べているのを見てほしがる。下の弟は少し大きいだけに、じっとがまんしている。

「よし、家へもどって食べ物を持ってこよう」私は決心した。暗くなってから、母の心配を背中に、家の方向に歩き出す。人はみな私に向かって逃げてくる。それに逆らって歩くのは私ひとり。「家へ帰ってごはんを炊いて、おにぎりをつくらう。鮭を焼こう」これだけ考えて歩く歩く。ちっともこわくない。その時、わたし十七歳。今の十七歳を考えると、我ながらよくやったと思う。でも、その当時はみんなこんなものであったらう。そうしなければ、生きていけなかったのだから。

艦砲射撃の中、私は家に入りごはんを炊き、食べられる物をリュックに詰めた。おにぎ

りも漬物も持った。「よし、もう誰にもやるもんか。家の者だけで食べるんだ」悲しいけれどこれが私の実感であった。当時、母はまだ三十七歳。父は出かけたきりで安否はわからず、幼な子をかかえ、食べる物もなく、どんなに心細いことであつたらう。

とにかく私は、重いリュックをかついで、再び歩く、歩く。まっくらな中、人の集まつていそうな所で母の名を呼ぶが、母たちは私のいない間も進んでいるので、なかなかつかまらない。リュックは重し、母はいないので、誰にもたよれない。しかたない、みんな自分のことで一杯なんだから。

さだかではないが、縦走している樺太山脈の頂上あたりで母たちをみつけ、その時、戦争は終わったらしいとささやかれていた。

八月十五日である、山の空気はつめたかった。戦争は人間の心を心でなくする。

誰もみんな知っている、お互いに助け合うことの大切さを。そして、我が身を賭しても守ることを。でもそれは「平和」という一番大切なことが前提にあつてのことではないだろうか。戦争は、人の心をふみにじり、人を人でなくする化け物だと思ふ。五十年たつて、あらためて「平和」とは何かを考えてみる機会となつたこの企画に感謝してペンを置く。



悪太郎あくたろうの死

羽村市栄町一―八―六十八 志賀 一男

私が生まれ育った町は、温泉と石炭産業の盛んなところで、当時はそれなりに活気があり、暮らし易い土地柄のせいか人々の出入りが多く従って、子供達の世界もいろいろと変化が多かった。戦時下の物のない時代で、知る限り友達は皆一様に貧しく粗野であったが、どこか屈託がなく元気があった。

小学校の高学年に一人の転校生がいたが、これがとんでもない悪太郎だった。武田と名のる男で体格もよく腕力にまかせて弱いもの苛めを平気でするし、他人の物は欲しがる、金はせびるで、同級生は皆泣かされた。炭住街から通学してくるが、彼にはもつと不良の兄がおり、下の弟もワルで武田三兄弟といえば町でも有名で、誰も手出しできる存在ではなかった。

その頃、私の叔父は映画館を経営していたが、週替わりのポスターを掲示してもらう店

に半額の割引券となるピラ券というものを配る。私はこのピラ券をくすねては武田に献上して暴力をまぬかれ、なんとか平穏な付き合いを保っていた。武田は見てきた映画については私に報告して、二人は映画の感想を話し合い幼い感覚での奇妙な友情が生まれていた。やがて進学の手節に二人は別れて、私は電車通学となり会う機会も少なくなっていた。戦争は益々激しくなり、落ちついて学業に励むなど許される情勢でなく、間もなく、学徒動員の名目で日立市の電線工場で働くことになった。引率の先生は、山嵐のあだ名で親しみにくいが面倒見の良い先生であった。食糧事情が悪く、食べ盛りの私達はいつも空腹の日々で、家から持ち帰る食糧を分け合って食べていた。

日立地区は、日立製作所を中心とした軍需産業工場が多いため狙われるとは思っていたが、再三の爆撃を経験することになった。飛んで来る飛行機からバラまかれる豆粒のような爆弾を目撃しながら、防空壕に逃げ込んだこともある。この爆弾で他校の生徒が大勢犠牲になったことを聞かされた。

ある晩のこと、外は小雨模様であるために我々も早めに床に就いていた。空襲警報が鳴り目を覚ましたが、そのまま布団の中にいた。遠くに爆音が聞こえてきたが、一機らしいので未だ安心と思っていたその瞬間、パツと真昼のような明るさになった。曳光弾が落とされ艦砲射撃の始まりである。轟音と地響きで夢中で飛び起き、とにかく外の防空壕に逃

げ込んだ。「闇から大砲」というか恐怖の一夜であった。明ければ、直ぐ近くの工場は直撃弾で破壊され、民家にも相当の被害が出ている。もうこれまでと、命からがら逃げるため駅に急いだが電車は不通である。歩いてでも帰ろうと線路に入り歩いたが、もう生徒の統制はとれずバラバラになり、夕刻にやっと動いた電車では三人の仲間が肩を寄せ合っていた。それでも帰校してみれば全員無事であったのは幸いなことであった。学校にも行ったり行かなかったりで暑い夏を過ごす頃、この年終戦となったが正直何の感慨もなかった。当時の炭鉱には多くの朝鮮人労働者が働いていた。大半は強制的に連れてこられ過酷な労働を強いられていたが、日本の敗戦と同時に帰国がせまると、今までの鬱積した感情が爆発して集団暴徒になるという噂が町に広がった。特に労務係などは報復をうけ、身を隠すなど、駐在の巡査も隠れていよいよ無法地帯になりかけたときである。

炭鉱経営側は自衛の手段として近隣の暴力団を集めたが、これにあの「悪太郎」武田が登場するのである。一方の旗頭として子分を従え炭鉱の重要拠点を守る任務を請負い、肩で風切る勇ましい男伊達は、いつか見たヤクザ映画の主人公に習ったのか先頭にたつて指揮をとり、大いに目立っていた。この事件こそ彼の人生最高の出番であった。

時は流れ、潮の引くごとく朝鮮人労働者の帰国が始まり、町には静けさが戻ってきた。武田は多額の報酬金を貰い地道に暮らすかと思われたが、そうではなかった。

戦後の混乱はまだ暫く続き彼らの出番は終わらなかつた。職を求めてなだれ込むように炭鉱に人が集まると喧嘩や殺傷事件が頻繁にあつて、以前よりも殺伐となったからである。武田が死んだ。聞かされたのは木枯らしの舞う寒いところで、刺されて路上に倒れていた。そうである。二十二歳の若い死であつた。迷惑な奴ではあつたが、憎めない男でもあつた。終戦後の混乱する世相のなかで、余りに急いで枯れ葉のように散つていったのは哀れであつた。

確かに彼は、社会の落伍者であるが、多くの若者が共有するどうにもならない虚無感に翻弄された時代背景があつたことも事実である。



戦争体験記

羽村市羽中三一六一七

山田 二郎

終戦、それは私が十一歳、小学校五年生の夏休みでした。戦争体験といつても、戦地のこと何もわかりません。ただ戦争が終わって、本家の従兄弟が南方から復員して来て、

初めていろいろと話を聞きました。その従兄弟はラバウルにいたそうです。ラバウルは私たち子供にもなじみの所です。それは歌を歌っていたからです。その一節にはこんながあります。

さらばラバウルよ

又来るまでは

しばし別れの涙がにじむ

恋しなつかしあの島見れば

椰子の葉かげに十字星

従兄弟は毎日毎日地下壕を掘っていたそうです。その地下壕は、日本軍の航空隊の拠点になっていたそうです。

外地からの復員は、終戦からかなり経ってからでした。従兄弟は、復員してすぐには家に帰れず、横浜の病院に入院していました。マラリヤにかかっていました。父はたびたび本家の伯父さんたちと病院へ見舞いに行っていたようです。半年ぐらい入院していました。そして家へ帰ると、すぐその足で私の家の方へも来ました。本家はすぐ近くだったので歩いて来ました。その時の従兄弟は、頭の毛が赤茶けた色をしていて、毛は薄くひらひらして、足取りもちよっとふらついており、栄養失調みたいでした。そして、時々高い熱

が出る病気にかかっていました。

戦地も大変だったと思います。でも、日本でも大変な毎日でした。食料はなく、米なんか農家以外では一年に一度ぐらいしか食べられません。食べられたのは正月の元旦だけでした。それも本家の伯母さんが内緒で持ってきてくれたものです。普段の食事は、麦飯にサツマイモを切り込んで煮るといったものが主食でした。

戦争がだんだん近づいてきて、空襲が多くなってきました。各家庭では庭に防空壕を掘り、そして壕の中へ食料や水や薬などを蓄え、山からうるいの葉を取ってきてためておきました。うるいの葉はスマと混ぜて餅にして焼いて食べるのですが、スマは小麦の粉を取ったあとに残る種皮などの粉、つまり小麦の皮です。何もない時にはおいしく食べられるものです。また砂糖のような甘い物が全く無い時代でしたので、山へ行って松やにをつついてなめたり、桑畑に入って桑の実を食べました。みんな甘くておいしかったものです。戦争がだんだん激しくなっていくのがわかりました。敵機が上空を飛ぶようになって、毎日のようにサイレンが鳴り、そのたびに学校から家へ帰されるのでした。初めはB29が編隊を組んで高い所を飛んでいて、飛行機がほんとうに小さく白く見えました。敵機が本土に近づくと警戒警報が鳴りだし、そして、間もなく空襲警報が鳴ります。現在の火災の時に鳴らすサイレンのような鳴り方でした。サイレンが鳴った時には、もう敵機はすぐ

そこまでできていて、爆音が近づいてくると思った時には、B 29の編隊が目の前に見えませんでした。そして、一万メートルの上空を飛ぶB 29には、下からの高射砲は届かないのです。下の方では高射砲が炸裂して弾幕が白く見えました。悔しい思いをしました。やがてB 29は低く飛ぶようになりました。

でも、一度だけB 29が白い煙をはいて落ちて行くのを見ました。私の住む山間の村まで艦載機が飛んできました。空襲で学校から帰される途中、艦載機がきて慌てて竹藪へ逃げ込みました。怖かったです。艦載機の機銃掃射で隣の人がやられたという話を聞きました。

そして、三月九日から十日にかけてのあの東京大空襲。私の家からもわかりました。東の空に赤い色が大きく広がっていました。父母が、今夜は東京がやられているなど言っていました。

そして、東京から隣の家に焼けだされた人が家族で引っ越してきた頃でした。私の村の人が「日本は負ける」と人前で言ったそうです。その話が警察官の耳に入り、大騒ぎになりました。なんでも死ぬほどやられたそうです。子供心にもいやでした。

それから間もなく終戦。戦争が終わってよかったと思えました。終戦のあの放送は今でもはっきり覚えています。私は、私の家からかなり離れた家で聞きました。その頃、どの

家にもラジオがなく、行ってみると大勢の人がきていました。その時、初めて天皇の声を聞きました。子供心にもしんみりと聞きました。



赤い雪

羽村市緑ヶ丘三一二十三―三十五

漆原 智良

父が、東京へ帰る日は猛ふぶきだった。

磐梯山をかけおりてくる雪が風に巻かれて、ふもとのちいさな街をつつみこんでいた。

「駅まで、いっしょについていくよ」

父の傍に、すこしでもいたかったぼくは、柱から防空ずきんを取りはずした。

「いやあ、この雪じゃ、帰りが大変だ……」

父は、気持ちだけでありがたいと首をふったが、そのときぼくは、すでにコートを身にまといはじめていた。

昭和二十年二月―当時、国民学校の五年生だったぼくは、東京の浅草から、福島県会津

の、猪苗代町の祖母のもとへ縁故疎開していたのである。

太平洋戦争は泥沼化し、日本は追いつめられて、食料不足。転校した先の学校では、軍事教練という名のもとに連日、荒地開墾、木材運び、肥料のための馬ふん拾い、イナゴ捕り、縄ない…などの労働作業。

それだけならまだしも、農作業の経験のない疎開学童のぼくには、作業量に達しなかった罰として、馬ふんを顔に押しつけられたり、生きたイナゴを口に入れられたりという、仲間たちのしごきが待っていたのである。ぼくは、それに耐えられなかった。

そこで、「浅草の同級生たちが集団疎開している宮城県松島へ行きたい」と訴えたものだから、父は心配して、猪苗代へとんできてくれたのであった。

「今は、戦局が重大な時だ。がまんしろ。集団疎開というものは、おまえが考えているほど甘いもんじゃない。毎日、洗濯もできずにシラミに泣かされているそうさ。それでも、みんなお国のために耐えているんだ…」

父は、浅草の同級生の親たちから耳にしてきた、集団疎開学童の生活の様子を、淡々と語ってくれたのだった。そのあと、東京の地図をひろげ、赤エンピツを取りだすと、

「東京はなあ、このところ、毎日のように敵機に襲われているんだ。焼夷弾を落とされて、この街と…この街も…やられて…」

と、父は地図を赤くぬりつぶしていったのであった。

猪苗代駅は、町の中心地から約二キロ離れたところにある。ぼくは、コートで身体をつつみ、父のあとにつづいた。父は背を丸め、頭で雪をよけていた。父の長ぐつが、ぼくに大きな足あとを作ってくれた。そこに、ぼくのわらぐつが吸いこまれていくとき、キュ、キュと、雪は心地よい音をひびかせた。

「東京の赤い雪は、人を殺すが、白い雪は気持ちがいい……」

ぼくの雪をふみしめる音を聞きながら、父はボンボンとつぶやいた。

ときおり猪苗代湖畔から風にのってくる雪が、下から顔をたたきつけ、まるで目かくしされたように、道がとだえてしまうのであった。だが、目がくらんでも、父の背が前で守ってくれていると思うだけでも、なぜか安心するのだった。

（戦争さえなかったら、毎日、父と一緒に生活できるのに……）

だが当時は、そんな思いを口にしたら、「非国民！」と、ののしられてしまう暗黒の時代だったのである。

太平洋戦争が勃発した昭和十六年十二月八日、ぼくはまだ二年生だった。浅草の街は、旗行列やら、日本のすさまじいほどの勝利の戦況に沸きかえっていた。

ところが一年後形勢は逆転。昭和十八年には本土決戦の状況までが想定されはじめたのだ。その年、ぼくの母は、竹やり訓練、バケツ消火訓練の過労がもとで倒れ、この世を去ってしまった。昭和十九年になると国の命令によって、東京の学童たちは強制的に疎開させられることになったのである。その年の夏、ぼくは父の生家へ疎開し、軍関係の仕事に携わる父だけが東京へ残ったのだった。

「白い雪は、いいよなあ……」

父は、また同じことばをつぶやいた。

三十分ほど雪にもまれたのち、駅に着いた。

待合室の中央には木炭暖房器が置いてあり、金網の柵で囲ってあった。列車を待つ十数名の乗客たちが、そこに帽子や、軍手などを掛けて乾かしていた。きなくさい湯気がいく筋も流れをつくり、天井で渦巻いていた。

駅員が待合室に顔を出し、「雪のため、上り列車は二十分程遅れる」と、乗客に告げた。乗客たちは、互いに顔を見合わせ、困ったものだというような渋い表情をみせていた。だが、ぼくは父と一緒にいられる時間が、それだけ長くなったりうれしきで、にやっと待合室の大時計の針を見上げたのだった。

まもなく、二十分遅れの上り列車は、ぼくの胸の奥のよろこびを切り裂くようにホームへすべりこんできた。車輪のきしむ音が、うす暗くなりかけたホームを走りぬけて、列車は止まった。

「じゃ、元気でなあ。すこしぐらいのことで、へこたれるんじゃないぞ。また、来るからなあ……」

父は、ぼくの背中を軽く数回たたくと、列車に乗り込み、空いている座席をさがすために早足で奥へと向かっていった。

ぼくは、父の姿を追いながら、雪の積もったホームを前へと進んだ。

父は座席を決めると、くもっている車窓に息を吹きかけ、手のひらでくるくると、こすりはじめた。車窓ごしに父の顔だけがくつきりと映し出されてきた。ぼくは直立不動の姿勢をとると、防空ずきんに手をあてて敬礼した。すると、父も軍帽をかぶりなおし、まじめな顔で返礼をした。それから二人は、ほとんど同時に、ニッコリと笑った。それは「お互いがんばろうな」という、無言の笑いでもあった。それが、ぼくにとっての、父の最後の姿であった。

父を乗せた列車は、夕方の白銀の世界に、黒煙だけを残して消えていった。

それから十数日後の、昭和二十年三月十日―『B 29 百三十数機帝都来襲、深夜市街地を

盲爆』(新聞の見出しより)。

その夜、ぼくの父も含めて、十万人にもおよぶ尊い命が還らぬ人となってしまったのである。

戦後、ぼくは(戦災孤児)というらく印を捺おされてしまった。だが、たえず「赤い雪は降らせない」という信念と、人びとに「笑顔で接する」という行為とを、しっかり両手で抱えて歩みつづけていったのである。別れの日「父が残していった言動」を守るために…。



語り伝える義務

羽村市羽中二―十五―十二

大塚 勝江

一九九五年一月十七日朝、テレビが伝える阪神淡路大震災の映像は、五十年前の東京大空襲をまざまざと想起させ、私の背中に冷たいものが走った。

燃えさかる炎の向こうに昇る真っ黒な朝日。黒い太陽が私の目に甦る。(煙のために太陽が真っ黒に映る)

一九四五年、女学校一年だった私は、期末テストの勉強を終え、空襲に備え、寝巻等には着がえられず、昼間の服装のまま、布団の中へ入り寝ついた時、サイレンと同時に「ヒューン・バリバリ・ズーン」

真昼のような閃光、わが家に焼夷弾が落ちた。燃えている。火はたきで焼夷弾を床にたたき落とし、ぬれムシロを目の高さに構えてかぶせる。防空演習で習ったマニュアル通りに消火していると、

「今日はこの辺り本所・深川がねらわれている。母さんと二人、先に逃げなさい。神田の焼け跡がいい。早く!」

父と兄をのこして逃げる事に、文字どおり後髪を引かれる想いで母と駆け出した。

両側の家がごうごうと燃え、逃げる人を赫々と映し出す。その炎の中にB29の翼が悪魔の羽のように影を落とすと、直撃を受けた人が紅蓮の炎につつまれるのだ。

足がすくんで動けなくなった私に、

「さあ、ここをぬけて宮城前広場へ行こう。震災の時あそこで助かったから」と、いつもは遠い雷の音にもおびえて「南無阿弥陀仏」を唱えふるえている母が、私の手を強く引く張った。

「震災もこんなだったの?」

「震災の方がずっと怖いわよ。地面が波のようにゆれ、さけるのだから。こんな空襲、上から落ちてくるのに当たらなければ助かるのよ」

ニコッと笑う母の顔。私の心から恐怖が消えた。この母の顔が、昨日のように鮮明に想い出される。亡くなって二十年たつのに。

頭から水をかぶり「一・二の三！」猛火の中をくぐり抜け、宮城前広場まで逃げのびた私。母の判断・はげましで助かった。

今、阪神淡路大震災の被害を目の前にしてこの時の母の言葉が再び甦る。

「地震は天災で防ぎようがないから怖い。戦争は人が起こすのだから、いくらでも防げる」そして、阪神淡路大震災の尊い犠牲の方々は五千五百余人、

東京大空襲の尊い犠牲の方々は十万余人。

戦争がいかに、無差別大量殺人かという事が明らかである。

人と人の争いから、国と国の争いへ。原因は、水・食物の奪い合いから宗教の違いと、さまざまある事は、歴史が教えてくれるが、根本は「相手を認めない事・自己中心」である。「自分だけ・自分の家族だけ・自分の国だけ」と。特に日本は単一民族だけにこの観が強い。

この瞬間にも地球上のどこかで戦争が起こって、多くの命が失われていく。第二次世界大戦の反省から、国際連合の活躍があるし、日本の明石代表の身命を賭しての活躍は周知

の事実である。

今年が戦後五十年。日本は五十年平和が続いたのだ。更に、この平和が続くよう、そして限りある資源の青い星「地球」の中でくらし続けられるよう、戦争が人を狂気に陥れ、どんなむごい事をするか、次の世代に語り伝える義務があるのではないか。

「あやまちは二度と繰り返しません」をキーワードとして。

黒い朝日を二度と昇らせぬために。

目を大きく、羽村市から東京へ、東京から日本へ、日本から世界へと開き、「人」の字のように、相手を認め、支えあうくらしをバトンとして、次の世代に渡していきたいと強く願っている。



時代の一証人として

羽村市羽東二―十九―四十 小山 琢也

ソ連軍戦車の上陸を要撃すべく、朝鮮半島北部の「富坪」という村の山岳に陣地を構築して、対戦車攻撃の訓練に明け暮れていた矢先に、終戦の放送を感度の悪いラジオで聞いた。

その時、戦友と共に肩をふるわし、拳を握りしめて敗戦の悔恨に溢れる涙を押さえることができなかった。

兵として御国の勝利を信じていた私達は、これから先どうなるかということも、もちろん知る由もなく、まして以後二年間極寒のシベリアに異国の捕虜となつて、強制労働に服することになろうとは…。

タンカーの船床に板の簀を敷いた急ごしらえの輸送船に、米やら干し明太やら、果ては鉄道のレールから肥料まで、ソ連軍の略奪物資と一緒に、原油の臭いのむせかえる船底へ

私達は押し込まれて、船は元山の港を出航した。

ソ連兵に船の行き先を問えば、ただ「トーキョー」とだけ答える。しかし、朝鮮半島の陸地を左に見て、船は北へ進んでゆく。命令と運命に従順な兵も、厭な予感に脅えつつ…。十月というのに、上陸して連行されるこの辺りは、早や枯野原。今は武装を解除されて丸腰となった部隊は、前後左右を剣付鉄砲のソ連兵に囲まれて黙々と歩く。

抑留されたのはペレボーズネという日本海海岸に近いソ連極東海軍の訓練基地。ただ広い丘に、電柱みたいに高い柱を一メートル間隔に四重に配し、バラ線を張った囲いが収容所（ラーゲル）であった。

私達の前任は、「ゲルマン」と呼んでいたからドイツ兵の収容所であったのだろう。

ラーゲルの四隅には歩哨の櫓があり、私達捕虜は、以後四六時中自動小銃を持った少年の様な若い歩哨達に監視されることになる。

齡二十三、四、青春の真っ盛りをこの地で過ごす。

初めての年の秋、シベリアから南下する鶴の列を異郷の空に追いながら、遠い家郷のこどもに想いを馳せ、春帰って来る鶴の渡りを眺めてはまた故郷を偲ぶ。あの鶴の様に羽があるなら飛んで帰りたい。が、ここはツンドラの僻地、仮に脱走して歩哨の銃口を逸したとしても、この原野を彷徨して果たして生きて帰れるだろうか。

私達は、共に励まし合いひたすら耐えた。いつの日か必ず帰れる日が来ると信じて……。ああ、早く帰ってぼた餅を腹いっぱい食べたい。「どこそこのお祭りのご馳走にはこんな餅をつき、こうして食うのだ」「森永のキャラメルを奥歯で噛んだあの甘ったるい味が忘れられない」などと毎日食う話だけで日が暮れる。

冬の凍る野外作業から帰っても、ガランとして何も無いラーゲルのペチカに寄り添っても皆無口。捕虜に何の希望が、夢があるはずがない。

昭和二十二年の春になると、帰国（ダモイ）の噂がいよいよ具体的になり、収容所の人員の入替えが行われるようになる。今にして思えば、ソ連軍の秘密のリストにより、残す者帰す者を分けたのである。

皆の顔が急に明るくなり、元氣を取戻した。そして、待遇もやや好転して、さすがに疲弊した交戦国の食糧事情も良くなってきたのだろうか。それとも、連合国から待遇改善を迫られたのだろうか。

六月中旬ナホトカへ集結した数千人の仲間の中に、私もいた。久々に会う者もいたりして賑わいをみせていた。この最終収容所では、共産教育もいよいよ徹底して、毎日労働歌を歌いデモ行進の練習である。宣伝将校は講義と、そして「君達は日本へ帰ったら共産党へ入り労働運動に励め」という。

ナホトカから舞鶴港への旅は楽しく、浮き浮きしたものだ。日本海に白波を引いて帰国を急ぐ引揚船興安丸にイルカがお出迎え。船腹にびったり寄り添っていつまでも泳いでいた。

今、故国の港へ船は入る。中国北部やシベリアの広漠とした風景の中に過ごした私達の眼に、心に、何と舞鶴の港は緑深く美しく映ったことか。

何がなくてもこの緑深い日本。水も空気もきれい。そして帰郷の列車の沿線や駅に「引揚者の皆さんご苦労様でした。お帰りなさい」と大書した歓迎の垂れ幕に、焦土と化した故国の人達の魂をみつけた。

夢多かるべき青春を、戦争と敗戦と抑留という大波にもまれ、そして生き残った。また戦後の再建、人生の構築に向けて生きてきた。今、私は、あの波瀾の時代の証人として、あえて戦後五十年のこの時、彼我を問わず多くの戦争犠牲者の鎮魂と自分自身の反省をこめて、平和のありがたさ、尊さをしっかりと心に刻み、時には反省して、日本の将来に再び過ちのないように替わなくてはならないと思う。



飢え

羽村市緑ヶ丘二―四―三十三

佐久 文雄

私が小学三年から五年生だった頃の日本は日中戦争のさ中。「ノモンハンでソ連軍にさんざん叩かれた」「ソ連の戦車に火炎ビンで立ち向かった日本も先は見えてる」「戦争をなじった国会議員が除名されたってよ」などの噂をきのことのように思いだす。そして奈落の底につながる日米戦争へ突入していく。

みる間に増える軍事費と深刻なインフレ。増税のため源泉徴収が開始された。大人は陰で盛んにこぼすが、必勝のやせがまんは日本中に広がる。

耐え難い空腹。減る小遣い銭。二十粒十銭のキャラメルも口にできず、一杯八銭のシルコも店頭から消えた。一個四銭の大福もめったに見られぬ。たまに並ぶ大福にツバをのみ込む。

飢え、食う、生きるに挑戦。弟とシマヘビ取り、崖、林、草むらを探す。病院へ持って



佐久さんがよく捕まえたシマヘビ

いくと、太めで一メートルぐらいが七十銭。結核で長患いの人が一円をはずみ「コゾウ、三日に一匹とって来てくれ」。でも一匹みつけるには大変。だれもが栄養源にあさったのか、ほんとにヘビは貴重だった。

腹ペコで、道端の石がボタ餅に見える。トイレの溜め便には腹の異常にふくらんだネズミが集まってくる。「紀元は二千六百年」を唄う旗行列に狩り出された。まんじゅう屋の前を通る。一個十二銭と三倍の値上がり、一斉に唄をやめ饅頭を見つめた。

生木一束、谷から背負って、木炭車の道まで上げると二銭。弟と学校を休み一日がかり六十四束。親方は二銭余分の一円三十銭くれた。大型で重い五十銭銀貨二枚を二人で代わりばんこ握りしめる。「コメ買って、小さい弟、おっかあ、おとうをよろこばせよう」。五店目でやっと米にありつく。一升四十七銭の筈が五十九銭。二升買って十二銭が手元。キャラメル舐めながら帰ろう。ところが十三銭に値上がり一銭の不足に空しい思い。

ミツバ、ヨモギ、フキ、こしあぶら、食える山菜は採りつくされ山にはない。どこの家も七分搗きの米に、山菜を青くなるほど混ぜ炊きして足しにする。節約米は一粒でも兵隊さんに提供。そ

の戦場も飢えの毎日だったという。

「父よあなたは強かった」「わが大君に召されたる」の軍歌をハーモニカで聞いて大変あこがれた。楽器店をたずねる、三円九十銭する…。ヘビとり、マタタビ（九粒で五銭）、エゴの木の実（一升一円二十銭、洗たく代用石鹼に貴重）など一年がかりで八円ためた。忘れもしない二年後、先生の命で音楽会に独奏し感激だった。

八円ためたとき、おっかあにさんさん怒られた。「エゴは下着のシラミ退治に一番いい、沼のドジョウもエゴ汁で取れる、よそにやらんで」

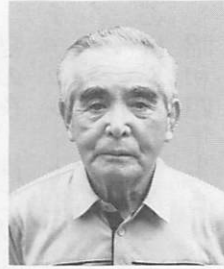
夏の夜、裸で寝間に立つ。ワラぶとんの辺りから、ノミがぞくぞく素脚に這いあがる。チヨコレート色のノミを、指先で押さえて、二、三回もみころがし、いろり火に落とす。プシュッと音。朝、ふとんをめくる、赤くむらがるノミの一団。尻から腹は吸血跡でごぼごぼふくれ、なでると無数のイボ、カズノ子の面を思わせた。

昭和四年生まれの私から徴兵検査なし。飢えたが、「教練」と呼ぶ軍隊のマネごとはせずに済んだ。

口減らし（一家の負担軽減）と国のため、「満蒙開拓青少年義勇軍」で行った人の哀れな話は今も絶えない。

三日に一度、若い出征兵士を旗行列で送る。間もなく戦死の知らせ。父の顔も知らぬ赤

ん坊を抱き若妻は涙にくれる。なんで大人たちは悲惨な戦争を好むのか、腹立たしく不信がとめどなくこみあげる。その若妻も息子と仕合わせな日々、それでも夫は忘れられぬと。戦争は心まで飢えさせ、人を悪魔に変える。五十年たっても戦禍は忘却できない。



私の戦争体験記

羽村市羽東三一七―七七

並木 茂一

昭和十三年八月二十一日、一枚の赤紙（臨時召集令状）により世田谷の自動車隊に応召しました。昭和十二年の徴兵検査では、第一乙種合格で、兵役は免除されたと思いこんでいました。西多摩村役場の兵事係が家に来て「お目出度うございます」といい、一枚の赤い紙を渡されました。兵役は免除と思っていた私にとっては青天のへきれきでした。一瞬、背筋に冷たい氷の様なもの走ったのを未だに覚えています。当時は軍国主義の盛んな頃で、赤紙で召集を受けるということは名誉なこととされてはいましたが、家に妻と二歳の男の子を置いての出征はつらい事でした。

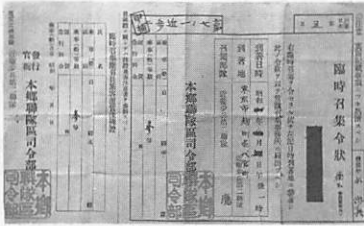
当時、自動車の免許証を持っていた人は、非常に少なかったもので、免許証のために自動車隊に召集されたのだと思います。

自動車隊に入隊、約二ヶ月程の訓練を受けた後に、昭和十三年十月二十九日に大阪港を出帆致しましたが、段々と日本から離れていくにしたがい、これで日本ともお別れかと思うと、甲板に並んで万歳万歳の声に手を振って応えていた戦友達は無言になり、ジワーと涙が目に浮かんでくるのを誰もかくそうとはしませんでした。

同年十一月五日、広東攻略のため、中国南部の澳頭港に上陸。十一月六日に「淡水」という集落に到着し、十一月八日まで澳頭から惠州間の兵員、兵器、弾薬、食料等の輸送任務にあたりました。

この地方の土は、レンガの様に赤く、車を通るとものすごい砂煙が上がります、五十メートルはなれた前の車輛は見えない程でした。そのため、昼間でもライトをつけて走りました。夜間は敵の目標になるため、ライトはつけられないので、車の助手が前を歩きながら、白手袋で誘導するノロノロ運転でした。

車の横を前線へ向かう歩兵部隊の方々には、砂埃を浴びさせて気の毒でしたが、任務のためには仕方がないことでした。歩兵部



召集令状（赤紙、複製）

隊の中には、疲れ果てて上官の乗る馬のシッポにつかまりながら、やっと歩いている者もあり、車に乗せてあげたい程でしたが、それもできず、通りすぎるだけでした。病気や、つかれて部隊より置いて行かれ、道端に横たわっている馬たちの中には、私達自動車隊が通ると、やっと首をもちあげながら助けを求めている様で、かわいそうでなりませんでした。戦争というものは、この様な悲惨なものであります。

「淡水」にいる時に、下士官以下兵五人、計六人で周辺の巡察に行きました。とある路地の奥で黒い物体がいるのを見かけ、近づくと老女と幼児がうずくまっていました。衰弱し切っている様子でしたが、任務のため巡察をつづけました。巡察を終え、隊に戻ったが、先程見かけた老女と幼児のことが気になって仕方ありません。八王子出身の戦友、秋田君に話したところ、秋田も故郷に妻子を残して来た身ゆえ、気になっていた様子で、早速、班長に話をして許可を得た上で、先程の路地裏の様子を見に行きました。老女は八十歳ぐらいで、あるいは顔や衣服がよごれているので、もっと若いのかも知れない。幼児は二、三歳でした。私達が近づくと老女はしきりに手を合わせ、我々を恐怖の入りまじった顔でおがんでおります。手振り身振りで、何もしないから怖がらないでよいと納得させました。幼児はと見ると、やせ衰え、東南アジアの難民の子どもの写真を新聞やテレビで見かけますがあんな姿で、肉は落ち手や足の関節が大きく、目はドロンとしたうつろな死んでいる

ような目で、目尻にとまった蠅を追い払う元気ありません。半開きの口よりねばっこいようなよだれを垂らして、じーっと座っております。

早速、持ってきた飯盆より飯を取り出して、口に入れてあげたが、もうかむ元気もなく、そのままでした。水筒の水を口にくましてもやりましたが、飲み込む力がない。老女が必死になって幼児のあごに手をかけ、飲みこませようとしたがだめでした。この様な状態の時には、おも湯から食べさせなければいけないとは思っても、戦地のこと故、それもできない。仕方なく諦めて隊に帰りました。これが戦場というものだと思つたが、どうにもやり切れない気持ちだ。帰ってから戦友の秋田と異口同音に出た言葉が「家に残して来た子ども達はどうしているかなア」でした。この他にも紙面では伝えられない様な悲惨な事柄も見聞きしましたが、この様な悲惨な戦争はもう二度とおこしてはいけなさと実感しております。

あとに心を残しながらも、命により次の目的地に翌日転進したので、二人のその後のことは知る由もありません。戦争さえなければ老女も天寿を全うし、幼児も今頃は立派な大人に成人していたことでしょう。

今まで日本程世界中で一番平和な幸せな国はない、と思つていましたが、最近の様々な

事件が起こり物騒な世の中になり誠に困ったものです。こうした事件が一日も早く解決され、国民一人ひとりがいつ、どこへでも安心して行ける様な世の中になることを願いますが筆をおきます。



戦中・戦後の 学校教育で

羽村市五ノ神一―六―四

渡辺 忠夫

私は、昭和十九年四月、東京（現在中央区）の旧制中学に入学した。家から都電で一つ乗り換えて、三十分程度の場所に学校があった。今思うと現在の中学一年生に比べ授業科目が多く、その半分が、教練、剣道、柔道、体操であった。特に教練は、各中学校に陸軍正規の配属将校がいて、軍事教育に参画していた。入学後間もない五月中旬、私達一年生は習志野にあった陸軍兵舎で、三泊四日の「野営」という軍人研修をうけた。食事も全く軍隊と同じであった。夜中に熟睡中非常呼集で起こされ、暗闇のなかで衣類を着用しゲートルを巻き、野原で点呼を受けた。また不寝番で交代で見廻りした。これらの行為で遅れ

た場合とか居眠りをして発見されたときなどは、恐怖の往復ビンタ等の制裁が待っていた。この野営が終わり帰宅すると、体中がかゆくてかゆくてたまらなかつた。衣類を脱いでみると、何と「しらみ」がかなり下着等についていた。母から「しらみ」のおみやげを持ってきたと笑われ、衣類をすぐバケツに入れてからそれをごとごと煮た。「何でこんなことするの」ときくと「しらみは熱に弱いからこれで退治するのさ」と言った。DDTのなかつたその頃に見れば、これがただひとつの駆除方法だったかもしれない。

旧制中学は一年生から五年生まで在学しているが、当時五年生は石川島造船所、四年生もどこかの工場に学徒動員令でいって兵器等の生産に従事していた。十九年の夏休みが終わると三年生にも動員令が来て、学校は二年生と私達一年生のみになっていた。

この年秋からアメリカ軍が占領したサイパン島からの日本各都市に対する空襲が始まった。登校して授業中警報が出ると、その時点で授業は停止となり、荷物をまとめて帰宅する。時には都電が不通となったり、通学途中の防空壕に避難したりして、帰宅が夜になったこともある。両親は前々から羽村に疎開を考えていたが、十月末、突然母が私を急に連れて羽村に来た。この時で私の学校生活は終わりとなった。その後、疎開生活、終戦、食料難、経済混乱等で、男三人食い盛りの兄弟だったから私の両親は毎日の生活が苦労だった。

世間が少しおちついた頃、何としても学業を中途で放棄した学歴が悔やまれたが、突然、友人の紹介で二十五年夏、国立の都立職業高校の定時制二年生の編入試験を受けた。同年齢の者と比べ二年遅れとなったが、途中からの入学は一年から所定に勉強した者と比べ、追いつくのに大変である。おまけに勤務が徹夜の一昼夜交代制で、毎日通学が不可能で、欠席日数も多かった。特に上司に嘆願して学校のない日曜、国民の祝日を徹夜勤務することにしてもらった。しかし定期試験が連続すると誠に苦労した。それでも三年生、さらに四年生になり修学旅行で関西方面に行ったときは、非常に嬉しかった。かつて小学六年の修学旅行でこの旅行をしていたものの、私達の年代からは戦争の激化で中止となったのである。

高校生活は二年半であったが、戦争中の教育とは様変わりで、教師に対する態度、それに男女共学等で違和感があったが、個人の尊重、合議による行動など、かつての全体主義、軍国教育とは異なっていたいい面があったと思う。

昭和二十八年三月この高校を卒業し、都心の私立大学に通学した。勿論仕事は相変わらずの一昼夜交代だが、必修科目を除き出席は高校と比べゆるやかであった。だが三時限の授業をしてくると、立川発二十三時二十分頃の奥多摩行き最終電車で帰宅し、寝るのが零時を廻ったことがあった。教養科程の終わった三年生になるとき、第一学部に入試試験を

受け、三十二年第一学部の卒業生となった。

仕事をしながらの勉学はつらい。しかし、今思うと苦しい中にも楽しさもあった。この苦労が後年報われて、職場内の養成機関で、資格・昇職試験の基礎となり、若くして幹部職、さらに現場長となり、幸福な家庭を作れたことに、ただただ感謝するのみである。



私の戦中戦後記

羽村市富士見平一―十八―十一―三〇五 山野 登

私は、一九二一年生まれ戦前派です。一九二三年に関東大震災が起こり、世の中が悲しみより立ち上がり、大正から昭和に変わり不景気の風が吹きはじめ、そろそろ戦争に引き込まれて行く様になりました。

忘れもしない昭和十六年、徴兵検査のため熊本の建設現場から大阪に帰る途中に、高千穂の峰の日の影駅にバスより乗り換える時、小さな子供が待合室で泣いているので、声をかけてあげていたら、警察官が駆けつけて友達と二人警察署に連行されてしまいました。

道場で逆さに吊り下げられ、竹刀でなぐられ、貴様等は共産党のスパイだろうと責め立てられました。「我々は徴兵検査のため帰る者であり、友達の伯父さんが当地の日の丸バスの社長でいるから電話してくれ」と言うのと、電話をしたのか急にやさしくなり、もう帰ってもよいと言いだした。

今も昔も同じ、地元の有力者が怖いのであろう。謝り状を書けと迫ると、まあまあとごまかそうとするので、こちらにも意地悪く憲兵隊に通告すると脅し上げ、延岡から別府を回り、船で大阪に帰りました。

この友達も昨年亡くなりました。また、数十年ぶりに妻と共に九州観光のおり、彼の地を訪れ感無量でした。

熊本の建設現場も、後で聞くところによれば水俣病の原因を作る工場でした。患者の皆さんに心よりお詫び致しまして、全快をお祈りいたします。

思い出多き人生を省みて、戦前戦中の一コマを書き残します。



私の戦争体験

羽村市神明台三二二一八 堀 静子

「この御恩は大空でお返しします」といって幼な顔の残る十九歳の品田君は、サイパン島の敵艦に突入しました。品田君は群馬県生まれで、幼い時両親が亡くなられ親戚の家で育ったそうです。飛行機乗りの兄さんのもとで暮らす様になり、横須賀に転校し、私の弟と同じになり親友になりました。

その頃、民間の食料事情は極めて悪くなっておりましたが、母の実家が茅ヶ崎の農家でしたので、私の家は余り食料に困りませんでした。それで、品田君は下宿の様な私たちで我が家の住人になりました。

戦局が厳しくなったことが私たち国民にも分かる様になった昭和十七年ごろでしたか、品田君は海軍飛行兵を志願して、我が家から入隊して行きました。

折々の上陸時には母が品田君の好物を作り、皆で団欒の時を過ごしました。ある日、い

つもの楽しいときが過ぎて帰隊支度を終えた品田君は、両親の前に正座して、「おじさん、おばさん。親の無い僕を、親以上の気持ちで可愛がって下さって有難うございました。皆にも兄弟同様に優しくしてもらい、本当に楽しい家庭生活をさせていただきました。この御恩は大空でお返しします。明朝十時、家の上空を三回旋回します。それが僕のお別れの挨拶です。そのまま、サイパン島に突入します」と言って深く頭を下げました。

父は品田君の手を取り「品田征くのか」と言って唇をふるわせ深く頭を下げました。翌朝十時、上空を旋回する品田機に家中夢中で手を振り見送りました。そして、家の中へなだれ込み、皆泣きました。私達一家の住む横須賀を、帝都を空襲から護ろうと、品田君は特攻を志願したのでしよう。

その後、サイパン島は玉碎し、本土空襲がはげしくなり、敗色いよいよ濃くなった頃、次々と特攻兵器が造られました。人間魚雷回天は全長十五メートル、直径一メートルの魚雷に潜望鏡と操舵をそなえ、中に人間一人がすわり魚雷の目となって敵艦に体当たりする文字どおり人間魚雷です。

断末魔にあえぐ祖国を救うために、青春真ただ中の命を捨てて盾となった人の多くは、言論の自由とデモクラシーの世を望んで止まなかった学徒出身者と予科練の若い方々でした。潜水艦の甲板に搭載されて、敵艦隊の集結している湾に接近し、潜水艦長より目標敵

艦の位置、距離を示されて、発射の前に「お世話になりました。後のことをよろしくお願いします」の言葉を残して、真白の死装束に短剣を持って、たった一人暗黒の中を敵艦めがけて発進していった二十歳そこその若者は、どんな事を想い、何を叫んでいったのでしょうか。短剣は万一敵艦に出会えなかった時の自決用です。

私の夫はこの潜水艦の乗員でした。

昭和二十年八月十五日。回天搭載後、出撃すべく出港命令を待つ潜水艦には、沖繩迄の往路の燃料しか無かったそうです。搭載している総ての武器で応戦して、最後は敵艦に体当たりして果てる作戦を持って出撃する直前に、天皇の戦争終結の放送でした。文字通り刀折れ矢尽きての敗戦でした。

未曾有の国難の時に生まれ合わせた若者達の殉国の行為は、私達年代の者が語り伝えなければと、かねてより思っております。そして私は、今日の平和で豊かな日々は、この方々よりの贈り物と思っております。

潜水艦が回天の発射訓練をした瀬戸内海の大津島に、回天で戦死された方々の墓標と、遺書、遺品を収めた記念館があります。

若妻の中には、発進して逝かれた夫の遺書を忠実に守り、みどりこ 嬰兒と二人戦後を生き抜かれ、今、七十路を迎えられた方もおられます。

五十年前の戦争についてやした犠牲の大きさに思いを致す機会と思い投稿します。新聞の短歌欄に読者が詠まれた短歌を拝見して、全く同感でございました。

特攻の遺書あまりにも似通いて昭和の罪をありありと語る



私の戦争体験

羽村市神明台二―二―五―二〇七 井澤 紀子

「ハナ子は母の故郷へ、タローは父の故郷へ…」この歌を知っていますか。私の戦争の想いは、この歌が語ってくれています。

私は、もうすぐ五歳になろうとする頃、東京の三月大空襲に港区芝白金で遭いました。その頃の東京は、毎晩サーチライトの交差する夜空に、真っ黒い怪物の様なB29がくつきりと浮かび、そこからバラバラと落とされる焼夷弾が模様のように見えました。空襲警報のサイレン、オーバーを着たまま床につき、夜中に防空壕に抱え込まれるという生活。こ

れが四歳の私の戦争体験でした。

昭和二十年三月、私は七歳の姉と二人、両親や兄達のもとを離れ、母の遠縁に当たる家に、伯母の家族と共にあずけられました。そこは、富士山の麓、御殿場村山の尻という所で、大変な田舎でした。田植え、どじょうとり、木苺、せみ、都会っ子の私達にとっては、ものめずらしく新鮮なものばかりで、傍目で見るとよりはみじめなものではなかったと思います。

でも、やっと覚えたカタカナで、毎日毎日「オカアサンコイハヤクコイ」と手紙を書きました。数日分まとめた封書が、母のもとに届いた時、いかにせつなかつたか、母はいつも涙して話してくれたものです。

当時、小学二年の姉には、桑の皮むきとか、野草とりとかのノルマが学校から与えられていて大変でした。何せ、姉の協力者は私一人でしたから。

八月十六日、終戦の翌日、父と三番目の兄が迎えにきました。母の和服が化けた明石ぢみの標準服を二人おそろいに支度して。あとでわかったことですが、母は一夜でこれを縫い上げたそうです。私はその淡い水色の縞の服が好きでしたが、母はそれっきり一度も着せてくれませんでした。「私の悲しみの記録。涙の素」といって大切に一人しまっていました。

その母も送り、終戦から五十年たった昨年末、その服と防空頭巾を始末しました。これで、私の戦争の思い出に終止符を打ったつもりでいます。

私が羽村に来たのは終戦の年の十一月。一人の身寄りもない西多摩村に、私達一家八人は疎開してきました。その翌年四月、私は西多摩小学校に入学しました。当時の羽村は排他的で、疎開っ子の私は、なかなかなじめず、土地っ子のすることを、どこか別の所からジッと見ていました。「私の居るところではない」と心の中でくり返していました。その地に何と五十年。思ってもみないことでした。

羽村の古いこと、良く知っていますよ。土地っ子の貴方達よりずっと。何しろ冷静な目でジッと見つめてきたのですから。

○○さんのおばあさんがお嫁に来た日のことも。○○さんのお母さんをたらい風呂に入れた時のことも。初午の旗に書く字も、ついこの間見た様な羽村の古いこと。食べ物がなく、野草を摘んだ土手。今は何にもみじめでもなく、なつかしい思い出です。

誰かあの頃の歌と一緒に歌いませんか。「ハナ子…」の歌も、「青葉茂れる」「轟く砲音…」も。



戦闘のない戦記

羽村市羽加美三―十五―十六

榎戸 一雄

北はアリュウシャン列島から南のソロモン、ニューギニアまでと拡がった戦線と、アツツ、サイパンの島々を始め守備隊の相次ぐ玉砕による戦局の重大な変化に対し、兵員の大増強が必要となったため、明治六年に発布された徴兵令が、昭和十八年に改正された。昭和十九年からはこれまで満二十歳であった徴兵検査が、一年繰り下がり十九歳で実施された。私はこの年の徴兵検査により、年の瀬も迫った十二月の二十日に東京麻布（現港区）の東部第十六部隊に通信兵として現役入隊をした。

著しい兵員の増加のためか、正規の兵営もなく、寺の本堂が仮の宿舎として当てられていた。しばらくこの本堂で起居し、年が明けた二十年の正月早々に、初年兵受領のため、中国中部の原隊から来た下士官に引率されて、中国大陸に渡るため品川駅を発った。

当時、軍隊の行動は防諜上機密とされていて、私達には目的地等は知らされてはいなかつ

た。下関で一泊、翌日の夜門司港から出港し、韓国の釜山港に上陸した。汽車に乗り朝鮮半島を一路北上、鴨緑江を渡って旧満州国（現中国東北部）の長春經由で、山海関から中国北部に入った。北京から今度は南下、南京へと向かった。途中徐州辺りでは、黄塵万丈の中を汽車が走り抜けて揚子江岸の浦口に着いた。揚子江を舟で対岸の南京に渡り、汽車で再び南に向かった。途中、蘇州で下車をさせられた。ここが目的地であり、部隊も矛第一二三四部隊であることを知った。

東京を発つ時、既に米軍機の空襲があったが、蘇州は治安も安定しているようであった。内務班における初年兵教育は想像以上に厳しく、禁じられていた私的制裁も堂々と罷り通っていた。五月の末頃に、大陸沿岸防備の要員として転属することになり、蘇州を後に上海から舟で浙江省の海岸にある寧波という町に着いた。しばらくこの町の仮兵舎で過ごした後、慈谿という町に移った。第九一旅団の旅団通信隊のある所で、私は旅団の通信室勤務となった。この地の部隊は戦局の変化に備えて、日夜を分かたず攻撃に備えて陣地を山の上に構築することに必死の毎日が続いた。

この頃、隊の糧秣は非常に乏しくなり下給された主食は、極めて悪い米に加えて量も少なかった。空腹をみたすため付近の農民の農作物を失敬したり、また副食物がほとんどなかった。野草の芹や篠の子を採り馬屋から失敬した岩塩で煮て食べる事が度々であつ

た。

私は七月末頃になって発熱し、診察を受けたところ、マラリアと診断され近くにあった野戦病院に入院した。一ヶ月位経って健康は回復したが、この時は既に八月十五日の終戦後であったため、部隊に復帰することが出来ず、そのまま病院生活を送ることになってしまった。九月になって上海の病院に全員移ったが、この時病院で一緒になった前線から後退してきた兵隊の中には、前線の極めて悪い環境や食料事情から健康を害して、体の衰弱がひどく、折角帰還を目前に集合地に着きながら、夢に見ていた祖国への帰還を果たすことも出来ぬまま亡くなった人もあった。収容所での生活は、一日も早い祖国への帰還の期待と、これが長びくのではないかとの不安に耐えながらの毎日であった。

二十年の十二月末頃になって、復員可能となり翌年の一月早々上海から復員船で長崎県の佐世保港に上陸した。数日間、引揚げ者の収容所で過ごした後、帰国手続が完了、汽車で佐世保駅から帰郷の途について。途中広島駅を通過、無残な原子爆弾の被害跡を見、厳しかった日本本土の戦争末期の状況を知った。次々と通過する沿線各都市もまた大きな被害を受けているのに、改めて戦争被害の悲惨さを思い知らされた感がした。焼野ヶ原の東京駅で乗換え中央線、青梅線と乗り継ぎ我が家に帰り着いたのは、一月十六日で、入隊以来一年一ヶ月、長いようで短い、直接戦闘のなかった、私の軍隊生活は終わった。



戦わざる補充兵

羽村市羽加美四―十一―五 羽村 正春

昭和九年春、当時の西多摩地方事務所で徴兵検査（昭和二十年まで、男子が満二十歳になると兵隊検査として受けるもの）を受けた。陸軍佐官級の人物が声高らかに「天皇陛下のご命令により、本日諸子の徴兵検査を行う」と宣言して、この事務所内で犯罪が行われた場合、軍法会議で裁く、と重々しく言い渡す。その時、第二補充兵合格と言いつ渡された。何がなんだかわからず引退したが、この時から、私には国家の非常時に召集されると覚悟みたいな思いが心の中に常に有った。奉公袋が渡され、補充兵手帳や日用品を用意されて、年に幾度か軍事訓練に引つ張り出された。

立川町（立川市）にある立川飛行機会社に入社した。身分は職工。この会社に入ったことで、私は兵役を逃れる可能性を得た。

日華事変、ノモンハン事変と紛争が起き、軍需産業は大繁盛。増産に増産と残業が続い

た。日本軍は、仏領インドシナ半島に無血進駐を行い、南方進出を決行した。戦局が段々と怪しい方向に向かって進んだ。それでも日本軍の勝利が続いていて、国民も生活が配給制度になって苦しくなっても、まあまあとの思いで暮らしていた。

召集される方も多くなり、甲種合格者ばかりか、第一乙種合格者にも及んだ。昭和十六年十二月八日、太平洋戦争に突入するや、男は戦地に駆り出された。

戦いの始まりは、勝った勝ったと日本国民は皆うかれた。しかし、私の勤める会社など、当時の敵国アメリカからロッキードの二十四人乗り旅客機を購入して、アメリカの技師が来て指導している有り様であった。アメリカでは流れ作業で生産があがっていると、飛行機を並べてみたが、部品不足でサッパリ生産が出来ない。

工場の通りは、何でこんなに人が出て歩くのだろう、と驚く程人が一杯になって歩いている。現在の工場は時間中には通路に人影も見えないのに、部品を運ぶ人、集める人、催促に歩く人など一杯である。これでは今日の工場管理から見ると、上に立つ人が管理できないのではないかと思う。この状態は他の産業も同じで、軍や兵器工場から集めた必要の無い部品が倉庫に山積みされて、終戦時これらが吐き出され、国民をビックリさせた。

徴用工（五十歳以上で商業などに従事していた人々。都内の商店の旦那様と言われる人達で、紙屋、酒屋等々で気の毒に思えた）、少年工、少女工といった十五歳位の子供まで

動員されて、飢えと寒さでサツマのつるで造った菓子、生大根に色だけ付けた漬物、口に入る物なら七色唐がらしまで食べている。私の班にはいった少女は四国から来た東山花子と岩手から来た成田美雪。二人共十五歳で、会社から支給された桑の皮で作った緑色の作業衣を着ていた。五十年過ぎた今もこの二人の名前はしっかり覚えていてる。

近所にも会社の内にも若い男がいなくなり、私達班長位が召集延期願に印を押されて召集を免れているのだ。召集をかけるのは天皇ではなく、軍の上部の人達で、その人達の心一つで自由に人の命が左右できたのだ。私は心の中で、卑怯者、非国民、裏切り者、不忠者、売国民、当時の非協力者にあびせられた言葉を自分自身に言っ、第一線に散った英霊の方々に心の中でお詫びしていた。

これがどういふ訳か、昭和天皇が崩御されるまで心の中から消える事が無かった。六回の召集延期願が出され、国内で働いたがその間だけの兵器の生産が出来て国家に貢献出来たのだろうか。最後まで国民に知らされなかった。微力な自分、ゼロに等しい能力、そして兵役を逃れた補充兵であったのだ。



黒い飛行機

羽村市羽加美四―一―三 小作 シズ

それは、とても恐ろしい出来ごとであったから、覚えている人はおおぜいいると思う。昭和二十年の五月の末頃であった。

私たち三人（主人の妹、弟の嫁、私）は、農作業を終えて昼食に帰るため宮ノ上街道の踏切を渡り切ったときだった。突然、頭上に落雷のようなものすごい飛行機の爆音を聞いた。

私と義妹は夢中で土手をかけ登り、桑畑の中へ身をかくした。主人の妹は間に合わなかったのか、土手にはりついていた。

耳をさくような爆音と、台風のとぎのような桑の葉のざわめき、銃弾が道路に当たるさまざまな音。私は思わず叫んだ。

「キクちゃん、死ぬなら一緒に死のう」

二人は桑の木の根っこにかじりついた。それは一瞬だったのだろうが、とても長い時間に思えた。飛行機が通り過ぎた瞬間、頭を上げてみると、あまり大きくない黒い飛行機が、向こう山を這い上がるようにして、稜線を離れていくのが見えた。

すくむ足で道路におりた。小作駅の方角に黒い煙がたちのぼっている。

航空母艦、艦載機、機銃掃射など、毎日聞いている言葉だったが、こんな方までくるとは思わなかった。

また、うしろから襲われるような恐怖を感じながら、三人は恐ろしさに言葉もなく、小走りに家の方へ急いだ。

けれど私はそのとき、八月中旬に生まれる子どもがお腹にいたので、走り続けることができず、根搦み坂の下にある親戚の防空壕で少し休ませてもらった。

家に帰ると、防空頭巾を被った私の二歳から八歳までの四人の子どもと、弟の子ども二人がメダカの学校のように、庭を駆けまわっていた。

時間がたつにつれ、いろいろな話が聞こえてくる。家の西方にあたるあまり遠くない所で、牛が弾にあたって死んだ。また、今、西小学校のある場所が西玉社という製糸工場であったが、その後、小穴工場という軍需工場になり、屋内で子どもに授乳していた若い母親を銃弾が貫通して亡くなった。

その日も主人は、在郷軍人の点呼で家にはいなかった。主人の弟三人は、戦争に行っていたが、主人は最後まで召集されなかった。だが、在郷軍人、警防団、実行組合などで、ほとんど家の仕事はできなかった。

先日、私は、その空襲の日が何日だったかを知りたくて、その頃、小穴工場で働いていた進藤さんに電話した。電話に出た奥さんは、その時のことをはっきりと覚えていて、「あれはたしかに、五月の二十八日でしたよ。私も工場にいて、その人の血だらけの着物を井戸で洗ったのを覚えています」と教えてくれた。

その日から二ヶ月余り過ぎ、終戦の前々日、空襲警報の続く中で、私は五人目の子どもを出産することになった。福生の畑さんという助産婦の世話になり、防空壕ではあとがいろいろ不都合だからということで、座敷で、あるったけの布団を積み重ねて、寝床を囲み、その中でお産をした。子どもは男の子であった。

その、翌々日、重大な放送があるというので、私も家族と一緒にラジオの前に座った。当時、一峰院を拠点として、農家の手伝いをする青少年勤労奉仕隊という団体があった。その日は、私の家の仕事をしてくれていた。

五、六人はいたその人たちも、縁側に腰掛けて、一緒に放送を聞いた。雑音でよく理解できなかったが、戦争が終わったということにはわかった。

「あーあ、負けちゃったんだなあ。奉仕隊ももう終わりだ」

口ぐちにいいながら、若者たちは頭を並べて、縁側に寝ころんだ。

主人が三十五歳。私は二十六歳。あれから五十年。今、親も子も、あるときプラス五十歳の年齢になった。



生みたての卵

羽村市緑ヶ丘五―七―二十六

徳澤 節子

戦後の混乱が色濃く残っている昭和二十二年晩秋のことである。

わずか二ページの朝日新聞の朝刊に載った一記事に、人びとは驚きの目をみはった。

それは大きな見出しで「食糧統制法に死の抗議」とあり、東京地方裁判所の一判事が「食糧管理法」を守ってヤミ買いを拒否し、栄養失調で亡くなったというものであった。

三十三歳という若さである。

私はその時中学一年であったが、この衝撃的な記事のことはよく覚えていいる。昭和二十

二年といえば、戦後から二年ほど経っているが、食糧はまだ非常に不足していて、父のいない私の家でさえ、配給になる食糧だけではとても足りなかった。母が時どき自分の着物などを風呂敷に包んでは、買い出しに出かけていった。

ヤミ買いを拒否して亡くなった山口判事の意志の強さに、私は心を打たれたが、ご遺族のことを思うと、胸が痛んだ。

そして、約半世紀過ぎた昨年十二月、やはり朝日新聞の夕刊に「判事の死、その後」という記事が、四回にわたって掲載された。

それによると、山口判事の実家は米どころの佐賀県である。遺書ともいうべき病床日記がつづられていた。それには、「自分は、ソクラテスが悪法と知りつつも、その法律のため、潔く死に服した精神に敬服している。自分はソクラテスならねど、食糧統制法の下、喜んで餓死するつもりだ。現在、被告の大部分は、食糧統制法の違反者である。裁く者がヤミ買いをしていて、どうして思いきった、正しい裁判ができようか」などと書かれてあった。

奥さんと、幼い二人の兄弟が残された。当時は夫人も、栄養失調で病床に臥して、朝日新聞の記者に語ったそうである。

「『たとえ餓死しても、ヤミ買いをしてはならぬ』と主人に厳しくいわれ、子供に充分与

えた残りを主人と二人で食べていました。日毎に体力がなくなっていくのがわかりましたが、主人の心持ちに打たれ、必死でついでいきました」

現在、夫人はすでに他界されていて、幼かった遺児兄弟も社会で活躍していられるが、成長期にはお父さんの死が、かなり重荷であったという。

佐賀の出身である山口判事は『葉隠』に親しみ、「武士道とは死ぬことと見つけたり」の言葉が信条であったのだろう、残された日記に、この一節が記されている。

私は三十三歳で没した山口判事が、なぜ兵役を免れたのかと思ひ、今度の記事をよく読んでみたが、それには触れていなかった。敗色の濃くなった戦争末期には、中年と呼べる人たちまで、召集されるありさまだったが、山口判事は身体が弱かったのであろうか、それとも職務上、国家に必要だったのだろうか。

『葉隠』の精神を尊んだ山口判事は、自分と同年輩の人や、より若い人たちが、戦争で命を失っているのに、自己は生き永らえていることが、苦痛だったのではないだろうか。たとえ、そうでなくても山口判事は、やはり戦争の犠牲者であることに変わりはない。

判事の死が伝えられてまもなく、一人のうら若い女性が二十四個の卵を持って、最高裁を訪れた。

「これはわが家の鶏が生んだもので、ヤミではありません。山口判事のように、ヤミをし

ない裁判官に差し上げて下さい」

この女性は、現在の「暮らしの手帖社」社長の大橋鎮子さんだったそうである。当時の鶏卵一個は、現在では考えられないほど貴重なものであった。

今、あの時代とは異なり「飽食の時代」と呼ばれて久しい。しかし、ひとたび昨年前半のような米騒動が起こると、人びとは必死で米を買ひあさる。それが半年たつたたないうちに、タイ米が捨てられているというニュースが新聞に掲載された。まさに何をかいわんやという感じがする。

私の夫がかつてある市の学校給食の責任者であった頃、給食の残りをいかにして少なくするかで苦心をした、と話をしていた。羽村市の学校給食は、どうなのだろうか。

今、私たちを含めて「食」というものを、もっと真剣に考えても良いのではないだろうか。



召集兵の追憶

羽村市川崎四―三―三十一 平井 英次

旧満州（中国東北部）での任務

昭和十六年、当時のソ満国境風雲急とあって、次々と召集令状が兵役関係者に通達された。当時、勤めの関係上中野区内の独身寮に居住していた私の手元に臨時召集令状が届いたのは七月十二日であった。いままでは、歓呼の声に送られて出征するのが習わしであったが、出征者の送行は防諜上禁止となり、七月十八日の入隊当日はおもいおもいの平服で入隊、なかには和服姿で入隊する人もあった。

入隊先は東部一〇部隊（近衛搜索連隊補充隊）宮五八六二部隊（独立自動車三十二大隊）であった。ここから中国東北部（旧満州）派遣のため八月十六日神戸港を出発、二十日に大連上陸、九月十日東安省密山県斐徳着。ここで駐屯、国境警備隊勤務に当たることになった。

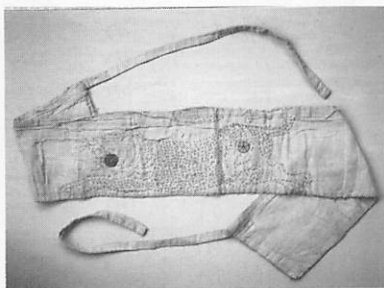


平井さんが戦地で身につけていたお守りの数々

広がる荒野のそこそこに湿地帯があり、遙か遠くに密山が見えるが、太陽は原野から出て原野に沈むという感じであった。冬は毛皮製の軍帽をはじめ軍靴にいたるまで毛皮ずくめの防寒着着用で、歩哨に立つと寒いというより肌をつんざくような痛さで、目の回りだけ開けてある軍帽をすっぽりかぶっていても、その間から漏れる息で睫毛が凍って白くなった。「銃に氷の花が咲く」の唄の文句は、野外から兵舎に入ると舎内の温もりで黒色の銃身がぱっと白くなる時の表現だ。また大陸は湿度が少なく軽い粉雪で積もらないし、衣類についても湿る心配はない。そんな少量の雪でも降った雪は春まで溶けないので、積み重ねで銀世界をつくるのだ。

この自動車部隊の冬の管理は大変だ。朝、ラジエターに水を入れ、行動が終わると夜間はその水を必ず抜き、凍ることを避け、自動車のエンジン部分や車の周囲をズック製の布で覆いデフなどが凍らないように下から木炭火を入れ保温をした。

明けて昭和十七年一月のこと、東安省周辺の部隊の上部部隊に当たる旅団司令部第二四四部隊に私は事務要員として転属になった。ここの任務は師団司令部の参謀部に当たる部員部要員なのだ。該当する令下に通達する書類などはここから発送された。



虎の形に刺しゅうしてある千人針

その厳寒時のこと、冬期演習が行われ椎橋少将閣下も、陣頭指揮のため他の隊員達と一緒に幕舎生活をされた。従って、私たち事務要員の幕舎も閣下の隣に設置した。その夕食時、何の肉だか食べたことのない肉料理が配膳され、事務要員一同思いがけないご馳走に舌鼓をうっていたら、甲副官と乙副官が血相を変えて飛んできて、

副官

「お前たち、夕食はどうした？」

要員

「はい頂きました。美味しかったです」

副官

「しまったー、美味しいのは当然だ。閣下に差し上げるものだったのだ」

話の内容は、令下の部隊長から閣下に贈られた雉子の肉を炊事要員が万全を尽くして調理したという天下一品のその料理を、飯上げ当番が取り違えたため頂けたという一幕であった。そんな司令部での任務を続けていた私の原隊に移動命令が発せられた。従って原隊復帰し中国に移ることになった。

中国の任務

昭和十九年四月十日、出発。列車は南下して湖南作戦に参加し、八月六日午後四時行動開始。軍行路を車が走っている折り、米軍P51戦闘機五機に狙われたため、車を離れて田の中に待避した。その待避した地点を五機の飛行機が入れ替わり立ち替わり機銃掃射した。その弾丸は避けられたものの、人馬殺傷に使う落下傘爆弾が田の中で炸裂し、その瞬間右大腿部になにか「プスッ」と感じたなと思ったら田の水面に血が染まりはじめた。

「ヤラレタ」と足を押さえ、自動車の止まっている方向を見ると車から煙が上がっていたので、一緒に乗っていた運転手と予備員に大声で「オーイ自動車から煙が上がっているぞ、早く消し止めてくれ。俺は足をヤラレタから上空を監視している。車には砲弾が積載されているからこれが炸裂すると全員やられるぞ」この声を耳にした二人は車に飛び入り発火前にもみ消した。

以後九年間、右大腿部盲貫創として弾は足に入ったままであったが、昭和二十七年三月十七日、当時の西多摩村診療所医師福島大壽先生の摘出手術を受けて平癒したのである。とにかく平和が一番である。



戦時中（現役兵）の 思い出

羽村市羽東一―十二―四十

新井 四郎

私は昭和十四年五月、徴兵検査の結果甲種合格となりました。同年十二月十日千葉県佐倉町歩兵第五十七連隊に入隊いたしました。

入隊後間もなく、中国北部への派遣軍に出征することを知らされました。約一週間位小銃の射撃訓練を受けました。現地部隊から輸送係の将校や下士官が来ており、同月二十三日、芝浦港を出発して同月二十九日、中国塘沽港に上陸して、列車で中国河南省清化県に到着。当時紀元二千六百年の一月元旦に現地部隊の歩兵第二二一連隊第一中隊に入隊しました。

当日は軍旗を迎え、連隊の入隊式がありました。中隊では初年兵の教育訓練が行われると共に、沁陽県清化鎮付近の警備につきました。同年四月十六日から同月二十八日まで春季普南作戦に参加しました。



現役兵当時の新井さん

四月二十九日、日華事変の功により、勲八等瑞宝章並びに従軍記章を下賜されました。同年七月、清化鎮陽邑廟警備中、同月十三日夜、敵の襲撃を受け交戦中に左大腿部に貫通銃創を受け野戦病院に入院しました。退院後、再び清化鎮付近の警備に従事しました。昭和十六年一月から二月まで、普南作戦及び五号作戦に参加し、同県付近の警備を行いました。

昭和十六年五月一日から六月中旬まで中原会戦に参加しました。この作戦では、私は特命工作隊として、日本軍に協力している中国人と共に中国服で敵中深く進入して、敵の大部隊の行動等を察知して日本軍の部隊本部に情報を報告する任務を行いました。

六月から河南省済源県付近の警備を行い、九月一日から下旬まで、綏靖軍反乱部隊掃討作戦に参加しました。九月下旬から十一月中旬までは河南作戦に参加しました。作戦中、

十月四日の鄭州攻略戦では敵前渡河を行い、朝の六時頃から午後三時頃まで戦闘が続きました。この戦いで中隊長以下多数の戦友が戦死し、また多数の負傷者も出し、中隊の三分の二は倒れる悲惨な作戦でした。

十一月から済源県付近の警備に従事しました。昭和十七年四月から五月まで、西部肅正作戦に参加。昭和十八

年、同県大波頭付近の警備、並びに敵襲による討伐作戦に参加しました。

昭和十八年十月、十四年兵に日本の東部六四部隊に転属命令が出て、清化県清化鎮駅から貨車に乗車して日本に向けて出発し、東北部經由で安東から朝鮮新義州を経て釜山に着きました。朝鮮の各駅では湯茶の接待を受けました。

釜山から連絡船で九州博多に向かいましたが、一週間前に連絡船が米軍の潜水艦に撃沈されましたので、嚴重警戒のもとに航行されました。事故もなく九州博多港がかすかに見えた時には非常に懐かしさを感じました。

想えば四年前に芝浦港から出発する時は、大勢の人の歓呼の声に送られ、また当時出征兵士を送る歌（わが大君に召されたる）に励まされ、前線に出征するからには生きて帰れないと覚悟しておりました。中国前線で四年間、戦闘に警備に日を送りましたが九死に一生を得て帰還できたのは夢のようでした。

九州博多から列車で千葉県佐倉東部六四部隊に帰隊いたしました。約一週間位で満期除隊となり、埼玉県秩父の実家に帰りました。

平成四年四月十八日から十四日間、戦友四十名で河南友好訪中団を結成して、約五十年ぶりで中国公安局の許可を受けて中国河南省の奥地を訪れ、亡き戦友の墓参りをして墓前に焼香することができました。



約五十年ぶりに訪れた中国・河南省にて

また中国人民政府七ヶ所（孟県、清化県、修武、武渉、新郷、焦作、鄭州）を表敬訪問して、政府要人と歓談し、記念品の交換を行うなどして親善旅行を果たすことができた。

終戦（召集兵）の思い出

昭和十九年八月、臨時召集（赤紙）により、東京の近衛歩兵第三連隊に応召入隊しました。同日、私は第九中隊所屬となり、約一週間の出発準備のち部隊は伊豆大島の警備にあたることになりました。八月に芝浦港を出発し、大島岡田港に到着しました。

私達の中隊は大島岡田村に宿舎があり、旅館と民家を借りて小隊または分隊に分かれて軍隊生活を行いました。海岸の生活は初めてで、夜は波の音が耳に入り、なれるまでは寝られなかったが海の眺めはまた格別でした。

召集兵は十三、十四、十五年兵が主力で、補充兵もいて将校下士官も全員召集兵でした。昭和十九年八月から二十年二月まで毎日陣地構築の作業に従事しました。

大島は観光地のため何の軍事施設もなかったので、本土決戦に備えて突貫工事で陣地構築作業に昼夜交代であたりました。山に

は坑道を造り、また要所々々に鉄筋コンクリートの陣地を構築しました。一番困ったのは水不足で、雨水を水槽にためて飲料水にするので、日照りの時には水も配給の状態でした。(岡田村にて)

昭和二十年三月から終戦まで、大島泉津村から約三キロ奥の巨勢川監視哨勤務につきました。小隊長以下二十三名で、分隊ごとに一昼夜交代の勤務でした。

私は分隊長を命ぜられ、勤務につくと空と海の監視警戒に努めました。敵機を発見して機種、機影と高度等を部隊本部に電話で速報するのが任務でした。敵機の本土空襲は日々激しくなり、二十年三月十日の東京大空襲の時には、大島から東京深川方面の空が真っ赤に見えました。

敵機B29は、はじめ大島上空を高度で飛んでいましたが、友軍の地上砲火が少ないためゆうゆうと飛び、東京空襲の帰りには機灯をつけたまま飛行していました。大島にはほとんど爆撃はなく、艦載機の機銃掃射を受ける位でした。

戦局は、その後広島、長崎の原爆投下、ソ連の参戦等があり日本は重大な局面にせまられていました。やがて、昭和二十年八月十五日となり、正午には天皇陛下の重大放送があることを聞きました。終戦の放送であることは知らず、勤務に従事していました。午後になり日本が無条件降伏をしたらしいとの話をする者がいましたが、私は信じられませ

んでした。

やがて午後五時、中隊長から全員に重大放送の伝達があるから、宮庭に集合するよう指示がありました。全員整列してから、中隊長は沈痛な顔で、「本日正午、天皇陛下の重大放送があり、日本はポツダム宣言を受諾し無条件降伏をしたが、国体は護持されるのであるから我々は日本陸軍として動揺することなく、あくまで冷静に上官の命令によって行動するようにされたい。やがて大島の要所々々には横文字の地名がつけられるかも知れないが、陛下の示された堪え難きを堪え、忍び難きを忍んで日本の復興のために全力を尽くしてもらいたい」と訓示をしました。全員一人として声を出す者もなく、ただ涙を流して男泣きに泣きました。

しばらくは張りつめていた気持ちが一気にぬけ、魂のぬけた人間のように呆然としていました。降伏後は、米軍の艦隊が昼夜東京湾に向かい航行するのが大島から見えました。その後、部隊の兵器返納等残務整理が行われました。最後に部隊全員整列して軍旗奉焼式が行われ、一同起立して軍旗に敬礼し、涙をぬぐって別れを惜しんだ風景は忘れることができません。

やがて、九月二十六日復員が決定し、大島島民の盛大な見送りを受けました。木造船で岡田港を後にして伊東港に上陸し、伊東で一泊し翌日列車で伊東駅を出発し東京に向かい

ました。

東京に着いて、米軍の空爆による一面の焼け野原には誰もがびっくりしていました。そして大勢の進駐軍の姿を見て、敗戦のみじめさを痛切に感じました。

九月二十七日、故郷の埼玉県秩父の我が家に帰りほっとした気持ちになりました。

約二ヶ月ばかり農業に従事していましたが、故郷の山谷では終戦の変動はすこしも感じられませんでした。



想い

羽村市羽東二一六一九 柴田 久一

戦後五十年といわれても、あつと言う間の年月でした。

もの心ついた時から軍国主義教育を受け、何の疑う事もなく、不況の最中でしたので志願兵として昭和十一年一月に千葉の鉄道連隊に入隊しました。僅か一ヶ月余りで二・二六事件が起こり、非常呼集で完全軍装し、雪の営庭で中隊長の事件に関する訓示を受けたの

を昨日のこのように思い出します。事件は一週間程で一応収まりました。

初年兵の私達は多忙な毎日でしたが、待ちに待った四月には一期の検閲も済み、これからの軍隊生活に必要な業務を修得することになり、私は機関車の運転技術を、羽村忠一さんは無線だったと記憶しております。私は機関車に触ったこともなかったので嬉しかった。教育は兵営内で学科及び投炭練習で、実習は外房線の大網、館山間、東金線の大網、成東間で国鉄の職員に教えを受け、後日国鉄の技能試験があり、幸いにも機関手に合格しました。教育期間は昭和十一年五月から十二年三月まででした。

四月に下士候教育のため津田沼の鉄連二連隊下士候隊に分遣中に、日華事変が起こり動員下令で原隊に復帰しました。羽村からも中野家一、小林文治さんが召集されて来ました。九月始めに、中国北部派遣のため千葉を出発しました。隊名は佐藤質部隊小諸隊で、この分隊長として加わりました。小林さんは同部隊で、中野さんは留守部隊に残りました。

部隊は門司港より釜山を通り平壤經由で、奉天、山海関から天津へ到着しました。天津は陥落直後で緊張していました。直ちに、天津起点の津浦線の鉄道復旧及び輸送に従事しました。

白河の堤防付近で初めて夥しい死体を見て、なんとも言えない気持ちでした。その後堤防が破壊され、見渡すかぎり一帯が水浸しとなり、深い所は二メートルくらいありました。

復旧は大変でした。いろいろと苦勞がありました。召集兵達は良く働いてくれ、大部分の方は東北出身で土地の話をよく聞かせてくれました。

十一月中旬には徳県まで進出しましたが、中国中央部への転進命令により天津、奉天を経て大連より上海の呉淞に上陸し、上海と南京間の海南線の復旧輸送に従事しました。中国の河の水は土色が多いのですが、崑山の川の水はとてもきれいでした。そこに死体が多敷散乱していましたが、前ほど感じません。慣れるという事は恐ろしいことです。

南京は十二月に陥落しましたが、忘れられないことは鎮江のトンネルが爆破されて不通のため、市内の道路を利用して応急に鉄道を敷設して、南京と上海間の輸送路を確保したことです。鎮江の河岸の近くに金山寺ミソで有名な立派なお寺がありました。

私の分隊は常州に分駐して付近の保線作業に従いました。この頃、例の南京虐殺の噂が伝わってきました。昭和十二年二月に南京と宣城間の南密線に前進していた中隊に復帰し、無湖の鉄道の復旧に従事。復旧で特記すべきは、無湖の対岸の裕溪口から巢県慮州の淮南線です。この修復は漢口作戦で京漢線の武勝関方面に必要な兵員、物資を輸送するためのものでしたが、毎日のように雨に濡れて、着替える衣類もなく約三ヶ月余り、路盤はいたるところ、ずたずたに寸断され跡形もなく、路盤の補修が出来ても肝心のレール、枕木等は敵が遠い集落や山林畑の中に埋めたのを捜し、元の路盤に敷設しました。

新設の方がはるかに早かったでしょう。何とか応急で試運転の列車が開通し、作戦に役立つて一同の喜びは格別でした。

昭和十三年十一月には漢口に転進、京漢線の漢口～長台間の復旧輸送に従事しました。

ここでも、武勝関墜道の復旧は困難をきわめました。この地では、三名の戦死者があり、一名は同年兵で共に機関車教育を学んだ大森曹長でした。

その後は南潯線の九江～南昌に転じ、九江より鄱陽湖を経て南昌に船で行きましたが、有名な廬山の山すそに友軍の戦死者の墓標が、林の如く並んでいました。

南昌では中野繁一、小林貞一さん達に会いました。南昌の復旧も終わり、漢口に帰り京漢線の長台関の輸送にと、各地を転々としていた時、広水で小林茂作さんに会いました。

何回か漢口等より長江を上下しましたが、特に春の船旅は戦場にいることを忘れるくらいでした。遠くの岸辺には、桃の花をながめ、時には揚子江にイルカが姿をみせてくれました。ただし、夏の漢口はむし暑く大変なもので、夕方になると風がなく、屋外で寝るようです。例えに、インド人がインドに避暑に帰るといふ話さえあり想像してみても下さい。当地には、日請さんがいました。

昭和十七年七月に航空部隊へ転科のため、二十二名の下士官を引率し漢口を離れ、岐阜の中部第九十二部隊に配属になり、下士候補、航技兵教育に従事。十二月には志村達雄さ

んが入隊してきました。また通勤の電車内で小作賢助さんに会いました。

昭和十八年四月には、またまた部隊は岐阜を後にして平壤へ移住し、引き続き航技兵教育を務め、昭和十九年隣の朝鮮第一〇一部隊の編成にともない転属しました。当隊は少年飛行兵の卒業後の操縦訓練を主としていました。

戦局も日ごとに急を告げ、昭和二十年三月に第二三編成飛行隊と改称、部隊名も宙五二七部隊となりました。この頃から特攻隊の編成派遣も多くなり、当隊からも何隊か編成され、多数の方が散華されました。近い所の方では、八王子出身の新井一夫さんが、五月二十七日第七十二振武隊で沖繩で戦死されました。出撃前に、私共の官舎で食事を共にしたのが精一杯でした。八王子の極楽寺に墓があります。安らかに眠ってください。

八月十五日、戦いも終わり、十六日夜平壤神宮が焼き打ちされ情けない思いをしました。私達の部隊は、三十八度線の北に駐留しておりましたが、運よく二十三日に朝鮮半島南部に脱出し、群山論山大田等で帰国を待っていました。北の部隊でしたので、乗船名簿に登録されていませんでしたが、英語の出来る将校がいて、米軍と交渉し、上陸用舟艇で山口県萩港に上陸できました。この時、言葉が通じるといふことはすばらしいと思えました。自ら選んで軍隊に入ったのですが、改めて考えると、二十代の十年近い年月を戦いにあぐくれたのは何だったのか、と自問自答することがあります。あの頃は、軍国教育を疑う

こともありませんでしたが、これからは事実に基づいた歴史教育をして欲しいと思います。また道徳に関することも同様です。五十年目の不戦決議で国会がもめていましたが、戦いで亡くなった方は、皆天皇のため、国のために命を落としたのです。問題はあると思いますが、戦いますが、天皇、政府は国民とアジア諸国民に対して、間違いは間違いと素直に謝るべきだと思います。自国の戦死者に参拝しない人が、外国の無名戦士の墓に参拝するのはわかりません。

戦いのため、多数の人が戦地に行き、各地の文化に触れて、いろいろと得るものが各人各様にあつたと思います。

これからの五十年も戦争のない平和な世でありますように、と祈ります。